令和２年度

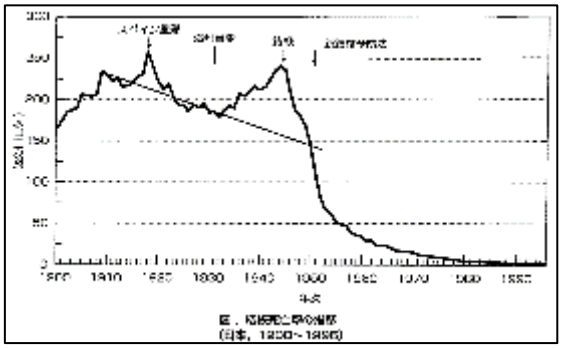
長期研修研究報告詳細版

興味･関心を持ちながら
協働的に課題に取り組む保健授業

―新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用と
グルーピングの工夫を通して―

興味・関心を持ちながら
協働的に課題に取り組む

見える化教材　＝　**グルーピングの工夫**



神奈川県立総合教育センター

体育指導センター　長期研究員

神奈川県立相模向陽館高等学校　髙橋　直人

目　次

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題・・・

第１章　研究を進めるにあたって

１　研究主題

生徒が興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組む保健授業
―新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用と
グルーピングの工夫を通して―

２　主題設定の理由

平成28年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」により、新しい時代に求められる資質・能力の育成のために「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が求められている(中央教育審議会　2016　p.26)。

また、これまでも重視されてきている協働的な学習や見通しや振り返りといった学習活動も、更なる充実を図っていくことが求められている(中央教育審議会　2016　p.35)。

さらに、『高等学校学習指導要領　解説　保健体育編　体育編（平成30年告示）』（以下『新解説保健体育編』という）には、「『保健』の指導に当たっては、健康課題を解決する学習活動を重視して、思考力、判断力、表現力等を育成していくとともに、『保健』で身に付けた知識及び技能を生かすことができるように健康に関する関心や意欲を高めることが重要である」（文部科学省　2018　p.197）ことが記載された。

本校は、神奈川県の県立高校として初めて開校した昼間定時制の高等学校である。中学校で学習面や対人関係等で、様々な悩みや課題を抱えていた生徒が多く入学してくることから、本校の教職員は寄り添い、励ましながら教育活動を行っている。しかしながら、授業において、興味・関心を持ちながら主体的に課題に取り組んだり、仲間との対話を通じて思考を広げていったりする学びが十分に実現できず、本校における課題となっている。

現在、新型コロナウイルス感染症が社会問題となっており、高校生の生活にも多大な影響を及ぼしている。そして、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）』(以下、『新指導要領』という)の内容について、「感染症の予防の内容が一つの項目として独立して示された。タイトルはまさに新型コロナウイルス感染症に対応できるように『現代の感染症とその予防』とされ」(森　2020)た。また、森は、「感染症予防に関する授業の中心は保健である」と述べており、現在、保健の授業で感染症の単元を指導する際は、新型コロナウイルス感染症を教材とすべきであり、この教材は高校生が身近な問題として、興味・関心を持ちながら取り組むことが期待できる教材である。

しかし、この感染症はウイルス自体や、これから先の感染状況等、不透明な部分が多いことから、抽象的な概念の説明だけでなく、教材を見える化することで興味・関心を高め、主体的な学びに結びつけることができると考えた。

また、本校の生徒を対象とし、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した川端の先行研究では、話さない生徒がいたり、その話さない生徒に不満を抱く同じグループの生徒がいたりと、話合いが上手くいかなかったことが報告されている(川端　2018)。さらに、筆者の経験からも、話合いでは、グルーピングがカギを握ると考え、まずは、話しやすいメンバーで、安心してグループ活動に取り組み、一つの課題に対話を通じて取り組む協働的な学びの実現を目指すこととした。

以上のことから、新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用とグルーピングの工夫により、興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組むことができると考え、本主題を設定した。

３　研究の目的

新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用とグルーピングの工夫を通して、生徒が興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組む保健の授業づくりについて、仮説の検証結果等をもとに提案する。

４　研究の仮説

高等学校第１学年の保健の単元「感染症とその予防」において、新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用とグルーピングの工夫により、生徒は興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組むであろう。

５　研究の方法

（１）研究を進めるにあたって、理論的研究を行い、仮説を設定する。

（２）理論研究を基に指導と評価の計画を立て、授業を実践する。

（３）理論研究と仮説検証の結果を基に、研究のまとめを行う。

※本研究では、『新指導要領』の総則等の内容を踏まえ、『高等学校学習指導要領（平成 21 年告示）』(以下、『現行指導要領』という)に基づき授業を実施した。

６　研究の構想図

自ら課題を見つけ、課題解決を図るために
他者と協働していく自立した生徒の育成

生徒が興味・関心を持ちながら
協働的に課題に取り組む

生徒が見通しをもてる	生徒が話しやすい
動画の収集、課題の設定 事前動画の作成	話しやすさを重視 話が得意な生徒を配置
見える化教材	グルーピングを工夫した協働的な学び

【新型コロナウイルス感染症】
教科書に掲載がない
新型コロナウイルスは未だ解明されていない

＜教育の課題＞	＜生徒の課題＞
●「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている	●授業に対して興味・関心が低い ●対話的な活動が苦手

第２章　理論の研究

１　興味・関心が高まる学びについて

本研究では、主体的な学びを目指すために、前提として興味・関心への動機づけが重要だと感じていた。そのため、興味・関心が高まる学びを目指すこととする。

（１）主体的な学び

ア　平成 28 年 12 月の「答申」によると、学びの質を高めていくためには、「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けて、日々の授業を改善していくための視点を共有し、授業改善に向けた取組を活性化していくことが重要である」と示されている(中央教育審議会 2016　p. 26)。

また、「答申」の補足事項では、「主体的な学び」について、次のように説明がされている（中央教育審議会　2016）。

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
【例】・学ぶことに興味や関心を持ち、毎時間、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる・「キャリア・パスポート（仮称）」等を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする。

このように、「主体的な学び」を目指すためには、学ぶことに興味や関心を持つことが大切である。

イ　次に、「答申」において、「主体的な学び」につながる要素をまとめたものが表１である（中央教育審議会　2016　pp. 26、47、49－50）。

表１　主体的な学びにつながる要素

【「主体的・ 対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ ラーニング」の視点）】 「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善であるが、形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するものであり、さらに、それを通してどのような資質・能力を育むかという観点から、学習の在り方そのものの問い直しを目指すものである。
【１．学びの質の向上に向けた取組】 子供たちは、このように、主体的に、対話的に、深く学んでいくことによって、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解したり、未来を切り拓ひらくために必要な資質・能力を身に付けたり、生涯にわたって能動的に学び続けたりすることができる。また、それぞれの興味や関心を基に、自分の個性に応じた学びを実現していくことができる。
【２．「主体的・ 対話的で深い学び」を実現することの意義】 子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

このように、「主体的な学び」を目指すには、下線のように興味・関心を基にすることが必要だということがわかった。

ウ　次に、『新解説保健体育編』では、健康に関する興味・関心や意欲を高めるための保健指導について、次のように説明がされている（文部科学省　2018　p.197）。「『保健』の指導に当たっては、健康課題を解決する学習活動を重視して、思考力、判断力、表現力等を育成していくとともに、『保健』で身に付けた知識及び技能をいかすことができるように健康に関する関心や意欲を高めることが重要である。」このように、健康課題を解決する学習指導を重視しながら、健康に関する関心や意欲を高めることが重要であることが示された。そのため、本研究においても健康に関する関心や意欲を高めるための指導を充実させることとした。

以上の事項を踏まえ、本研究では学ぶことに興味・関心を持たせることを目指すこととした。

２　協働的な学びについて

（１）協働的な学びについて

本校の生徒は、中学校で学習面や対人関係等で、様々な悩みや課題を抱えていた生徒が多く入学してくることから、本校の教職員は寄り添い、励ましながら教育活動を行っている。しかしながら、授業において、興味・関心を持ちながら主体的に課題に取り組んだり、仲間との対話を通じて思考を広げていったりする学びが十分に実現できず、本校における課題となっている。また、「答申」では、協働的な学びについて「『対話的な学び』を通じて育成される多様な他者と協働する力」（中央教育審議会　2016　p.35）と示された。このことから、本研究では「協働的な学び」を実践することとした。

（２）グルーピングの工夫について

前述した、「協働的な学び」を踏まえると多様な他者とのグルーピングを行うのが一般的だと考えられるが、筆者は本校の授業において教材の工夫が足りなかったことや、グルーピングの配慮をあまりしていなかったことで、仕方なく話す生徒やほとんど話さない生徒が見られ、一部の生徒はグループ活動を嫌がっていたことに苦慮していた。また、以前本校で保健の検証授業を行った川端は、対象となるクラスで、話合い活動に慣れていない生徒が多くいたため、単元を通して継続的に知識構成型ジグソー法を活用し、考えてみたくなる発問を多く取り入れた。それにより、生徒は話合い活動に慣れ、「主体的・対話的で深い学び」の実現が期待できると考えたが話さない生徒や話さない生徒に不満を抱く生徒もおり、成果が見られたのは、一部の生徒であったと報告している（川端　2018）。

以上のことから、まずは、対人関係を重視し、話しやすい人とグループ編成するといった配慮などをすることで、生徒が自ら安心してグループ活動に参加することを目指すこととした。それにより、興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組み、対話的な学びを実践することとした。

３　新型コロナウイルス感染症について

（１）『学習指導要領』と『学習指導要領解説』における感染症に係る記載内容について

表２　「感染症」に係る記載内容

	現行	新
学習指導要領	（１）現代社会と健康 イ　健康の保持増進と疾病の予防 感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。	ア　現代社会と健康について理解を深めること。 （イ）現代の感染症とその予防 感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人の取組及び社会的な対策を行う必要があること。
学習指導要領解説	（１）現代社会と健康 イ　健康の保持増進と疾病の予防 感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。	（１）現代社会と健康 （イ）現代の感染症とその予防 感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人の取組及び社会的な対策を行う必要があること。

表２は、『現行指導要領』では、「感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。」（文部科学省　2009　pp. 73-74）と記されており『新指導要領』においても、「感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人の取組及び社会的な対策を行う必要があること。」（文部科学省　2018　p. 178）と記されており、ほぼ同様の内容が記載されている。また、感染症に係る内容の項目として「現代の感染症とその予防」（文部科学省　2018　p. 178）と記された。さらに、森も「高等学校では、中学校と同様に感染症の予防の内容が一つの項目として独立して示された。タイトルはまさに新型コロナウイルス感染症に対応できるように『現代の感染症とその予防』とされ」（森　2020）たと示している。これまでは、「感染症とその予防」と記されていたが、「現代の」が加わったことで、現在世界中で問題となっている新型コロナウイルス感染症について、教材に用いることが有効だと考えられる。

（２）社会の現状と新型コロナウイルス感染症への対応について

新型コロナウイルス感染症は、各国で多くの人命と健康を奪い、経済に深刻な打撃を与え、私たちの生活を激変させた。日本では、緊急事態宣言が２回発令される等、異例の事態となっている。すでに感染者は世界で約１億千５百万人、そして死者は２百５十万人を超えている。また、国内での新型コロナウイルス感染症の感染者は 33 万６千例、死亡者は約 4500 名となっている（ＮＨＫ　2021　2021 年３月５日現在）。高校生においては、休校や短縮授業等の感染予防の対策を取られている。現在、世界中の人々が最も関心のある感染症であり、新型コロナウイルス感染症を教材として、保健授業で扱うことは効果的だと考えている。

森は、新型コロナウイルス感染症への対応について「これまで、どちらかというと感染症予防の知識について理解することに主眼が置かれてきた授業を、今回のような新たな感染症にも柔軟に対応できるように、保健で習得した知識を活用して、感染のリスクを軽減する予防行動を自ら考え、判断する能力を身に付ける授業へと変えていくのである。また、今回のように様々な感染症の情報が入ってくる状況においては、感染症予防や治療に関する正しく適切な情報を選択することが求められており、授業においても事例を用いたり、その状況をシミュレーションしたりして適切な健康情報を選択、活用する授業展開を工夫することが求められる。今後は、新しい学習指導要領を踏まえて、適切な健康情報を取得し、新型コロナウイルス感染症を含めた感染症のリスクの軽減を目指して課題解決に役立てることのできる能力を身に付ける保健の授業が展開されることに期待したい。」と述べている（森　2020）。

以上のことから、現在、流行している新型コロナウイルス感染症は、生徒が興味・関心を持ちながら授業に参加したり、授業で習得した知識を実生活の予防行動として、活用したりする上で重要であると考え、中心教材として扱うこととした。

4　見える化教材について

伊澤は、視覚化の効果について次のように述べている。「目で見ることの出来ない概念を教科書で学ぶ際に視覚化することは、教科書によって与えられたそれぞれの評価式を理解する上で有効である。ここで開発した教材を学生に体験させることは、教科書で学ぶ概念や式の確認が出来るばかりでなく、簡単な実験を自分で行うことで材料力学の本質である材料の負荷と変形に対する興味向上に大きな効果がある。」（伊澤　2019）

また、石田は、視聴覚教材の一般的特性として、一つ目は、学習意欲を高め、動機付けを強化する。二つ目は、経験限界を拡大する。三つ目は、現実を再構成する。四つ目は、学習者に共通の場を与える。五つ目は、教師のエネルギーを節約する。この五つを挙げている（石田　1977）。

以上のことから、本研究の授業においても、特に経験限界の拡大をねらい、肉眼では見えない新型コロナウイルスや飛沫等が見える動画を活用することで感染経路の理解を促すとともに、学習内容への興味・関心を高めることを目指した。

５　保健授業の評価票について

七木田は、中学校での保健の授業における、被授業者（子ども）の授業の受けとめ方に着目することにより、授業評価構成因を実証的に再構成し、その結果を考慮しつつ表３の「保健授業の評価票」を作成した（七木田　2002）。本研究では、高等学校１学年を対象であるが、七木田の中学生用の「保健授業の評価票」を準用し、生徒が毎時間の授業をどのように捉えたかを検証することとした。

なお、各質問項目の評価観点は、項目１～３は「意欲」、４～６は「興味・関心」、７～９は「有益性」、10～12 は「認識」、13、14 は「協力」である。ただし、本研究は、短縮授業であり、生徒に授業時間内に各質問項目を回答してもらうため、各評価観点から太字で記入している５つの質問項目を活用することとした。

検証にあたっては、七木田が中学生を対象に行った調査と同様に、それぞれの質問項目に対して「はい」は３点、「どちらでもない」は２点、「いいえ」は１点として評価することとした。

表３　保健授業の評価票

評価観点	質問項目			
「意欲」	１．せいいっぱい、いっしょうけんめい勉強することができた。	はい	どちらでもない	いいえ
	２．むちゅうになって、勉強することができた。	はい	どちらでもない	いいえ
	３．自分からすすんで、勉強することができた。	はい	どちらでもない	いいえ
「興味・関心」	４．「もっと知りたい」、「もっと調べたい」と思うことがあった。	はい	どちらでもない	いいえ
	５．「～を知りたい」、「～をはっきりさせたい」と思いながら、勉強することができた。	はい	どちらでもない	いいえ
	６．今日の勉強に興味をもち、ほかの関係することについても、調べてみようと思った。	はい	どちらでもない	いいえ
「有益性」	７．健康に役立つことを勉強した。	はい	どちらでもない	いいえ
	８．健康的に生活していくには、「こうすればいいのだな」と気づいたことがあった。	はい	どちらでもない	いいえ
	９．今日勉強したことは、これからの生活にいかすことができるだろう。	はい	どちらでもない	いいえ
「認識」	10．「知っていたこと」が、実はちがっていた。	はい	どちらでもない	いいえ
	11．「わかっている」と思っていたことが、実はわかっていなかった。	はい	どちらでもない	いいえ
	12．意外な事実を知った。	はい	どちらでもない	いいえ
「協力」	13．友だちから教えてもらったり、助けてもらったりした。	はい	どちらでもない	いいえ
	14．友だちと助け合って、学習できた。	はい	どちらでもない	いいえ

※「保健授業の評価票」は５つの観点、14 項目から構成されているが、本研究における授業は短縮授業であり、授業時間内に生徒が評価することを考え、５つの観点から１項目（太字）ずつ抜粋して活用することとした。

第３章　検証授業

１　検証授業

（１）　期間

令和２年 10 月８日（木）～10 月 22 日（木）３単位時間扱い

※新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により、１単位時間は 40 分で展開。

（２）　場所

神奈川県立相模向陽館高学校　社会科教室

（３）　授業者と対象

授業者　神奈川県立相模向陽館高等学校　教諭　髙橋　直人（筆者）

対象者　神奈川県立相模向陽館高等学校（昼間定時制）午前部１年１組 34 名

○対象者の実態について 　本校について、学校ナビゲーションでは次のように紹介している。「小中学校時代に学習面や友人関係で悩んだり傷ついたりしたことのある人や、不登校経験や退学経験のある人も、学び直しをしながら、これからの社会をよりよく生きるためのさまざまな力を身に付けられる学校です。」（相模向陽館高等学校　2020）

※学校ナビゲーションは、学校が独自に概要や特色等を紹介している冊子。

（４）　単元名

保健　第１単元　現代社会と健康　感染症とその予防

２　検証方法

（１）　主なデータの収集方法

ア　アンケート調査

（ア）実態調査アンケート（７月 31 日）

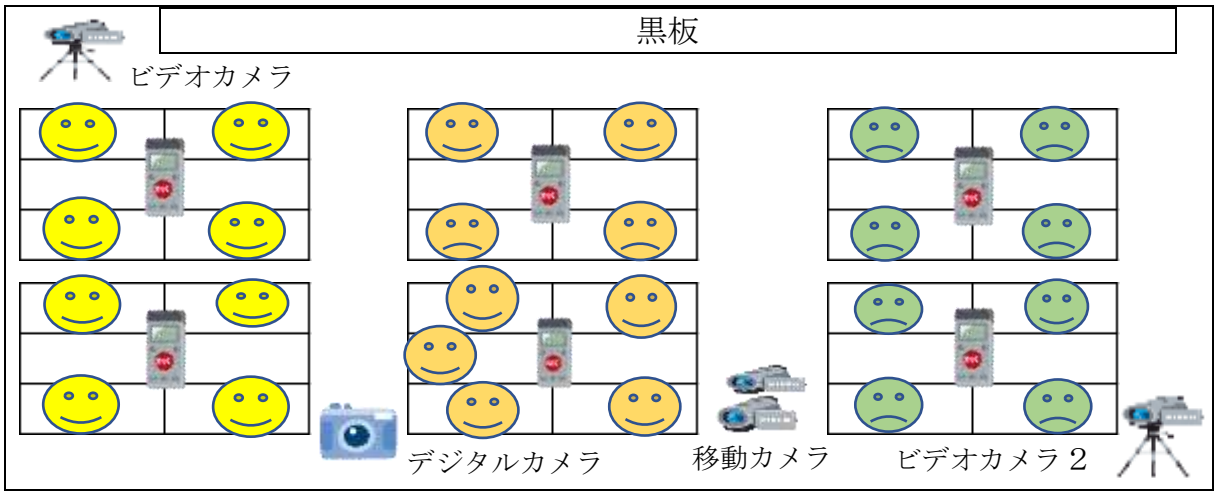
（イ）事前アンケート　　（10 月２日）

（ウ）事後アンケート　　（10 月 23 日）

イ　ワークシート及び学習ノート（毎時）

ウ　授業の様子を記録した映像及び音声

毎時間、授業開始時にビデオカメラで授業全体の様子を記録し、ビデオカメラとデジタルカメラで学習に取り組む生徒の様子を記録した。また、ＩＣレコーダーを班ごと（６班）に設置し、会話等を記録した。



（２）検証の視点と検証方法

今回の検証授業では、研究の仮説「高等学校１学年の保健の単元『感染症とその予防』において、新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用とグルーピングの工夫により、生徒は興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組むであろう」を踏まえて、次の視点により検証することとした。

ア　生徒は授業をどのように捉えたか

具体的な視点	検証方法	質問内容等	
生徒は授業をどのように捉えたか	学習ノートの質問（毎時間） 「保健授業の評価票」（七木田　2002） ※１～５は各評価観点（p. ８表３参照）	意欲 ※１	質問：「自分からすすんで、勉強することができた。」（３件法）
		興味関心 ※２	質問：「今日の勉強に興味をもち、ほかの関係することについても、調べてみようと思った。」（３件法）
		有益性 ※３	質問：「今日勉強したことは、これからの生活にいかすことができるだろう。」（３件法）
		認識 ※４	質問：「意外な事実を知った。」（３件法）
		協力 ※５	質問：「友だちと助け合って、学習できた。」（３件法）
「語り」をどのように捉えたか（p. 17 参照）	事後アンケート	質問：「授業の最初に教師の「語り」を聞くことで、授業に対する意欲が高まりましたか。」（４件法）	

イ　生徒は新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用をどのように捉えたか

具体的な視点	検証方法	質問内容等
新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用をどのように捉えたか	事後アンケート	質問：「見える化した教材（静止画・動画・図表・グラフ・表）はわかりやすかったですか。」（４件法）
		質問：「授業前に配信した動画を見ましたか。」（見た・見ていない）
		質問：「授業前に配信した動画を 1 度でも見た人は、その感想を書いてください。」（自由記述）
		質問：「感染症とその予防の授業で、教科書には載っていない新型コロナウイルス感染症を扱ったことについての感想を書いてください。」（自由記述） 質問：「今日の課題は、考えてみたくなる内容だと思いますか。」（４件法）

ウ　生徒はグルーピングをどのように捉えたか

具体的な視点	検証方法	質問内容等
グルーピングをどのように捉えたか	事後アンケート	質問：「今回のグループは取り組みやすかったですか。」（４件法） 質問：なぜ、そのように思いましたか。（自由記述）
	学習ノート(毎時間)	質問：「自分の考えを相手に伝えることができましたか。」（３件法） 質問：「グループの仲間の考えを理解することができましたか。」（３件法）

エ　生徒は授業（課題）に興味・関心を持てたか

具体的な視点	検証方法	質問内容等
生徒は興味・関心を持って授業に取り組めたか	事前アンケート	質問：「これまでの保健（中学校・高校）の授業に対して興味・関心が持てましたか。」（４件法）
	事後アンケート	質問：「今回の保健の授業に対して興味・関心が持てましたか。」（４件法）
	事前アンケート	質問：「これまでの保健の授業に意欲的に取り組んできましたか。」（４件法）
	事後アンケート	質問：「今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか。」（４件法）
	学習ノート(毎時間)	質問：「もっと知りたい」「もっと調べたい」と思ったことを書いてください。（自由記述）
生徒は興味・関心を持って課題に取り組めたか	ＶＴＲ映像 ＩＣレコーダー検証	観察（生徒、授業者） 発話記録（生徒、授業者）

オ　協働的に課題に取り組めたか

具体的な視点	検証方法	質問内容等
協働的な学びをどのように捉えたか	事前アンケート	質問：「これまでの保健の授業（中学校・高校）におけるグループ活動で、学びが深まったり広がったりしましたか。」（４件法）
	事後アンケート	質問：「今回の保健の授業におけるグループ活動で、学びが深まったり広がったりしましたか。」（４件法）
協働的な学びは有効であったか	ＶＴＲ映像 ＩＣレコーダー検証	観察（生徒、授業者） 発話記録（生徒、授業者）

３　学習指導計画

本検証授業は、『現行指導要領』に基づき行った。

（１）単元の目標

ア　感染症とその予防について、課題の解決に向けて、互いに意見を伝える等の学習活動に意欲的に取り組むことができるようにする。【関心・意欲・態度】

イ　感染症とその予防について、課題の解決を目指して、知識を活用した学習活動等により、総合的に考え、判断し、それらを表すことができるようにする。【思考・判断】

ウ　感染症とその予防について、地域や時代によって違いがみられることを理解し、個人及び社会的な対策を行う必要があることについて、理解したことを記述できるようにする。【知識・理解】

（２）単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
①　感染症とその予防について、課題の解決に向けて、互いに意見を伝える等の学習活動に意欲的に取り組もうとしている。	①　感染症とその予防について、課題の解決を目指して、知識を活用した学習活動等により、総合的に考え、判断し、評価したりする等している。また、それらを説明している。	①　感染症の感染源・感染経路・感受性者の原則について理解したことを記述している。 ②　感染症の発生や流行には、時代や地域について違いがみられることについて、理解したことを発言したり、記述したりしている。 ③　感染症の予防には、個人及び社会的な対策を行う必要があることについて、理解したことを記述している。

（３）単元の概要（40 分×３時間）

<table>
<tr><th>時間</th><th>1</th><th>2</th><th>3</th></tr>
<tr><td>内容</td><td>オリエンテーション
感染症とその予防</td><td>感染症とその予防</td><td>感染症とその予防</td></tr>
<tr><td>学習指導要領の記載内容</td><td>感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。</td><td>感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。</td><td>感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられること。その予防には、個人的及び社会的な対策を行う必要があること。</td></tr>
<tr><td>0
5
10
15
20
25
30
35
40</td><td>○オリエンテーション（２分）
○語り（５分）
・学習内容を伝える。
○アイスブレイク（３分）
・じゃんけんゲーム。

○発問（２分）
・「新型コロナウイルス感染症に感染していまい、差別や偏見を受けている人が多くいます。なぜ、差別や偏見がうまれるのでしょうか？どうすれば防げるでしょうか？」

○講義（８分）
・感染症の予防原則について理解する。

○課題に取り組む。（３分）
・個人で課題に取り組む。

○グループで知恵を出し合う。（５分）
・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。
○マスクの効果（５分）
・マスクの正しい付け方を実践する。</td><td>○語り（４分）
・学習内容を伝える。

○発問・ブレインストーミング（３分）
「新型コロナウイルス感染症の予防対策には、どのようなものがありますか？」

○講義（６分）
・感染症の予防・対策について理解する。日本の対策、神奈川県の対策について理解する。

○課題に取り組む。（15 分）
・個人で課題に取り組む。

・グループで取り組む。
・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。
・課題が達成していない人に課題が達成した人たちはヒントを与える。

○各グループが考えた対策を発表する。（７分）</td><td>○語り（５分）
・学習内容を伝える。

○発問（２分）
「新型コロナウイルス感染症以外で知っている感染症はありますか？」

○講義（８分）
・感染症は時代によって発生や流行に違いが見られることについて理解する。

○課題に取り組む。（８分）
・死亡者減少に有効な対策を考える。
・課題が達成していない人に課題が達成した人たちはヒントを与える。

○各グループが考えたグラフとその理由を共有（発表）する。（７分）
・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。

○講義（まとめ）（５分）
・今後の感染症との向き合い方について理解する。</td></tr>
<tr><td></td><td>○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（７分）</td><td>○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（５分）</td><td>○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（５分）</td></tr>
<tr><td>関心
意欲
態度</td><td></td><td></td><td>①❶</td></tr>
<tr><td>思考
判断</td><td></td><td>①❶</td><td></td></tr>
<tr><td>知識
理解</td><td>①❶</td><td>③❸</td><td>②❷</td></tr>
</table>

○指導の中心となる時間　●評価の中心となる時間

※新型コロナウイルス感染症感染拡大防止対策のため短縮 40 分授業

４　学習指導の工夫

（１）見える化教材について

本研究では、「見える(分かる)から、興味・関心が持てる(楽しい)」と考え、次の３つの見える化教材を活用することとした。また、40 分間という短い授業時間のため、インパクトを与えたいと考え、プレゼンテーションソフトを活用することとした。

ア　授業前に視聴する事前動画の配信（p. ７参照）

本研究では、学習面で様々な悩みや課題を抱えた生徒に対しても、次の授業で、どのような内容を行うのかがわかる（授業の見通しが持てる）見える化した事前動画を作成し、授業の開始前までに見ることで安心して授業に参加できるようにした。また、授業の見通しを持つとともに次の授業へ興味・関心が高まるよう、動画等を盛り込む工夫を行った。

次に授業前に生徒がスマートフォンで任意に視聴できるように、ＳＮＳ(ソーシャル・ネットワーキング・サービス）にアップロード後、オンライン学習システムに配信した。また、事前動画を作成するポイントを次のようにまとめた（表４参照）。

表４　事前動画を作成するポイント

①	インパクトを与える	⇒動画や図、表等をスライドに入れる
②	分かりやすい内容にする	⇒スライドに文字を少なくする
③	授業内容をコンパクトに伝える	⇒５分以内の動画とする
④	見やすい動画にする	⇒明るい部屋で撮影をする
⑤	教員が編集・加工が行いやすい	⇒スマートフォンで撮影をする
⑥	授業の予習を行いやすくする	⇒授業で使用したスライドをそのまま引用する

図１－１から図１－３は、表４を参考に作成し、実際に生徒へ配信した動画である。

図１－１　１時間目の事前動画の一部

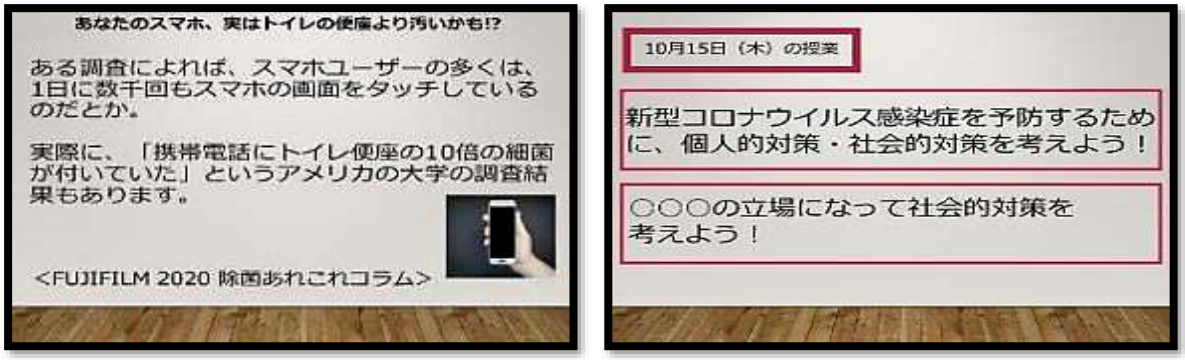


図１－２　２時間目の事前動画の一部

図１－３　３時間目の事前動画の一部

イ　新型コロナウイルスや飛沫等の動画の視聴

授業において、肉眼では見えない新型コロナウイルスや飛沫の流れを、筆者が録画したテレビ番組の視聴等を通して理解を促し、感染経路対策をより具体的に考えることができるようにした。

ウ　グラフの活用

本検証授業の３時間目には、まず、結核死亡率の推移のグラフ（図２参照）により、感染症が終息していく過程を説明し、現行及び新学習指導要の指導内容である、「感染症の発生や流行には、時代によって違いがみられること」を指導した。その後、新型コロナウイルス感染症による死亡者数が、今後 10 年でどのように推移するかをグラフで見える化しながら考える課題(結核死亡率のグラフで学んだ知識を活用する課題)を設定した。このように、グループで検討しやすい課題を設定するために、予測困難な未来を見える化することとした。

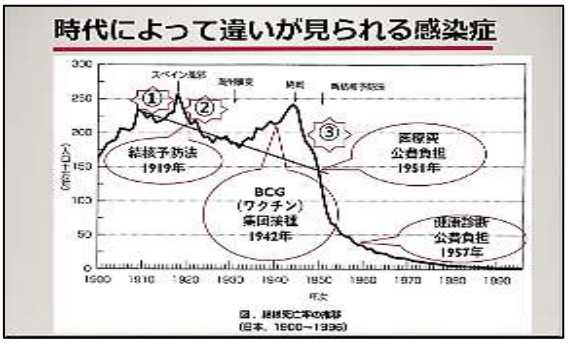


図２　結核死亡率のグラフ

（２）協働的な学びの実践

ア　グルーピングのポイント

協働的な学びを進める上で、人間関係に不安や悩みを抱えている生徒が、安心して授業に参加するため、グルーピングの工夫を行うこととした。

新型コロナウイルス感染症の影響で、長期の休校があり、授業に入るまでの登校日数が50日と例年よりも少ない日数で、担任も生徒一人ひとりの状況や生徒同士の関係性を把握することが難しいと感じていた。このようなことから、教科担当の力も借り、生徒の特性や生徒同士の関係性を授業の様子等、様々な場面を振り返りながら把握した。

そこで、グルーピングの工夫（p. ５参照）を軸にしながら、担任と何回も話合いをしながらグルーピングを行った。特に、話合いが苦手な生徒や、大人しい生徒が安心してグループに参加できるよう、話合いが得意な生徒を各班に配置するとともに、生徒の欠席も多いため、毎時間、保健の前の授業の出席状況を見てグルーピングを行った。

まとめると、グルーピングのポイントは、次の３点である。１つ目は、話合いが得意な生徒と苦手な生徒を同じグループにする。２つ目は、話しやすい関係性を重視したグループにする。３つ目は、出欠席に偏りが出ないグループにする。この３点をポイントとして、グループを編成した。

イ　グループ活動の工夫

グループ内で意見交換を行うポイントとして、１つ目は、メンバーが話をしている時はうなずくこと。２つ目は、メンバーが話をしている時は相手の目を見ること。３つ目は、互いに良い雰囲気で明るい表情を意識すること。この３点を授業内で伝えることにした。

さらに、入学早々に休校となったこともあり、互いの顔と氏名が一致していないことを考慮し、ネームプレートを机に置くことで、互いの氏名が一目で分かるようにし、安心して授業に参加できるように配慮した。

以上のように、生徒の実態を担任や教科担当と情報を共有し連携しながら、生徒が安心して話合いができるグループ活動の環境を整えた。

（３）その他の学習指導の工夫

ア　「語り」の導入

（ア）「語り」について

「語り」とは、西川が提唱する『学び合い』の授業で、授業冒頭で教師が生徒に対して学校観や子ども観を伝えることを「語り」と呼んでおり、子ども観は「君たちの可能性のすごさ。みんなでなら、必ずできるということ」と記している（橋本　2010）。

本研究では、西川が提唱する『学び合い』を実践し、成果を挙げていた橋本の「語り」を参考にした。橋本は、授業導入の「語り」について、「『学び合い』を成立させるためには、最初の語りは『とても』大事です。最初の語りは学年の最初、また学期の最初でなくても結構です。あなたが『学び合い』をやってみようと思ったその日で結構です。」と述べ、最初の語りで次の四つのことを語らなければならないと記している（橋本　2010）。

①大人になることが学校教育の目的（基本的な考え方の学校観に対応します）
②一斉授業より効率が良い（基本的な考え方の子ども観に対応します）
③本当に理解すること（答えのまる写しは駄目だということを伝えます）
④みんなで高まる（基本的な考え方の学校観に対応します）

本研究では、検証授業前のＬＨＲの時間と各検証授業のはじめに「語り」を導入した。具体的には、筆者の自己紹介とともに、学校に通う意義や協働的に課題に取り組む意義等を語り、内発的動機付けを高めるきっかけとした。

（イ）「語り」の内容

長期研究員として、日常的に関わりのない生徒に対して授業を行うことは難しいと感じていた。そのため、授業の１週間前のＬＨＲで「授業で大切にして欲しいこと」について、14 分間の「語り」を行った。「語り」の内容は、自己紹介以外に「①授業でコミュニケーションを取ろう」「②皆で助け合って授業に参加しよう」の２つの柱で構成した。さらに、自身が登った登山の写真を例に挙げ、グループ内で助け合うことで不安が解消され、達成感を味わうこともでき、協力して課題を達成することの大切さを伝えた。生徒にとっては、どのような授業を誰が行うのかを知る機会となり、安心して授業に参加するきっかけにつながると考えた。

※授業前のプレゼンテーションの詳しい内容については、「令和２年度体育指導センター長期研修研究報告スライド資料編」（pp. 20－23 参照）

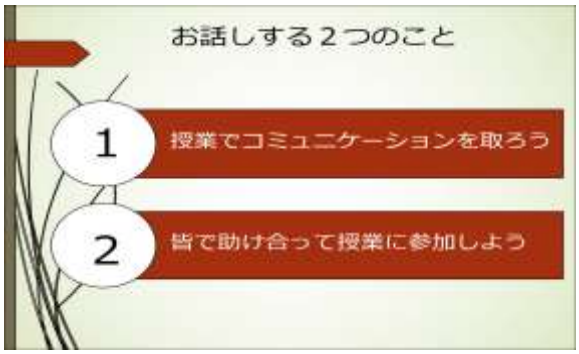


図３－１　「語り」の動画スライドの一部

図３－２　実際に「語り」を行っている場面

（ウ）授業導入時の「語り」の工夫

橋本の「語り」（p. 17 参照）を参考にし、授業導入時に、「一人だと分からない、難しいと感じるような課題にも、グループで協力することによって、課題を解決しよう」と授業に取り組む際の心構えを伝えることとした。さらに、２時間目以降は、前時の良い取組を「語り」の場面で共有し、グループで話しやすい雰囲気を作ることを心掛けた。

そこで、本研究の「語り」は表５の要件に基づき構成した。

表５　「語り」を成立させるための要件

【内容的な要件】

①授業で特に伝えたいことを３つ以内にまとめる。
②写真や図等で伝える。
③プレゼンテーションソフトのスライド等で視覚に訴える。

【方法的な要件】

①わかりやすい言葉で丁寧に話す。
②一人ひとりに語りかけるように話す。＊教師と生徒の問答はない。
③短時間で簡潔に話す。＊目安は４～５分。

【その他の要件】

①話す内容の一貫性に留意する。
②単元の学習内容につながるとより良い。
③前時の振り返り（取組）を伝えられるとより良い。

イ　授業通信の活用

１時間目の授業前に２回と、毎授業後に各１回の計５回、授業通信（図４参照）を作成し配付した。これにより、授業前の２回は筆者自身を知ってもらうために「自己紹介」や「なぜ、教師になったか」、「どんな授業を行うのか」等を記すこととし、授業後の３回は、一人ひとりの記述した文章を読んで、「他の人はこういうことを考えていたのか」、「こういう書き方で書くとわかりやすい」等、思考の広がりや、書き方の参考になることを期待し、生徒の振り返りによる自由記述を載せた。

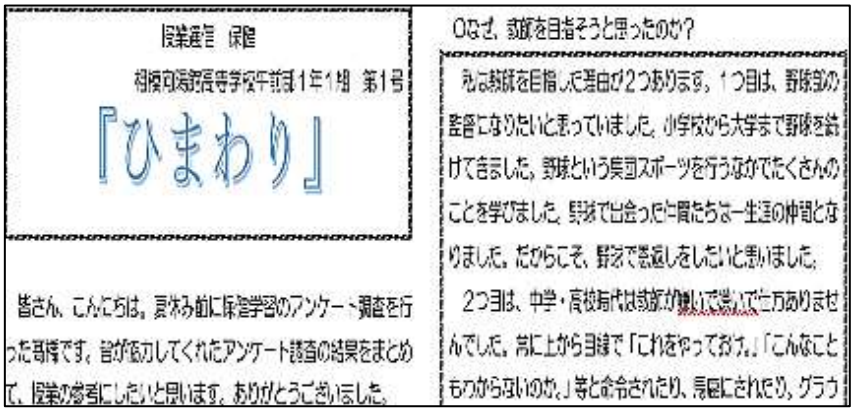


図４　授業通信

※授業通信の詳しい内容については、「令和２年度体育指導センター長期研修研究報告資料編」（pp. 37－45 参照）

ウ　学習ノートの活用と工夫

Ａ３判の用紙を二つ折りにして学習ノートを作成し、授業開始前に机上へ配付した。学習ノートを開くと、本時のテーマとねらい、授業の内容を確認することができるため、生徒は「授業の見通し」をもって授業に取り組めると考えた。また、学習ノートにワークシートを挟み、生徒の学習の記録を残すことができるようにした。

さらに、「学習の振り返り」をねらいと一致させることで、学習効果を高めるものとして活用した。

前述したワークシートは、プレゼンテーションソフトで作成した授業のスライドを基に作成し、生徒が、取り組みやすくできるように文字を大きくする等の配慮を行った。さらに、ワークシートは自らの考えや授業で参考になったことをメモするために活用した。

※学習ノートの詳しい内容については、「令和２年度体育指導センター長期研修研究報告資料編」（pp. 14－17 参照）

エ　生徒の実態に即した課題設定の工夫

これまで、自身の保健授業では、課題に対して、生徒自身が個々に考え、グループでディスカッションを行い、他者の考えに触れ、自らの考えを再構築していく活動を行ってきた。生徒にとって興味・関心が低い課題だと、主体的に取り組まないことから、授業の鍵を握るのは課題であると考えた。

また、朝倉は学習意欲を高めるための課題設定の在り方については、児童の学習意欲を高めるためには、児童の既有経験や学習の中で生じた疑問に関連させた課題を設定することが、有効であると分かったと述べている（朝倉　2013）。

このことから、朝倉の課題設定に対する考えも参考にし、本研究では、生徒の興味・関心が高まる課題を設定するために、１つ目は、実生活や授業の講義で学んだことを活用する課題とする。２つ目は、オープンアンサー（答えが一つではない）の課題とする。３つ目は、グループ内で互いに意見を伝えやすい課題とすることとした。この３点を課題設定のポイントとして、参考にしながら３時間の課題を設定した（表６参照）。

表６　「今日の課題」の概要一覧

１時間目	「ウイルス等の飛沫をブロックするための、マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう！」
２時間目	「三つの事例から、一つ選び、それぞれの状況をふまえ、責任者の立場で、新型コロナウイルス感染症の予防対策を考え、提案しよう！」
３時間目	「今後、日本の新型コロナウイルス感染症の死亡者数は、どのように推移するか考えよう！」

オ　レスキューカードの活用

これまでの自身の経験では、生徒が課題に取り組む際等に、分からないけれど、誰にも相談できずに困っている生徒がいた。

そこで本研究では、分からなくて困っている際、言葉で伝えられない生徒が安心して授業に参加できるように「レスキューカード」（図５参照）を作成し活用することとした。

図５　実際に使用したレスキューカード

カ　ＩＣＴ機器の活用

各自の課題に対して個人やグループで考える際、分からないことがすぐに調べられるよう、生徒に対し１台ずつにＩＣＴ機器（図６参照）を用意した。

図６　ＩＣＴ機器を活用している場面

キ　新型コロナウイルス感染症対策

新型コロナウイルス感染症対策として、学校における新型コロナウイルス感染症対策の基本的な考え方（神奈川県教育委員会　2020）を参考に、本研究の検証授業では、次の感染症対策を実施することとした。

（ア）　参観者の人数を考慮し、一般教室よりも比較的広い社会科教室を使用する。
（イ）　マスクを着用する。
（ウ）　換気を行う。
（エ）　手指消毒をして教室に入室する。
（オ）　グループで対話を行うため、周囲に飛沫が飛ばないようにパーテーション（図７－１、図７－２参照）を置く。
（カ）　グループで対話を行うときは 10 分以内とする。

図７－１　実際に使用したパーテーション

図７－２　実際に使用したパーテーション

５　時系列で示した学習指導の工夫等

本研究では、教師の授業前後の学習指導の工夫等も含めた実践が、生徒の興味・関心を高め、協働的に課題に取り組むことにつながると考えた。図８は、実際に行った学習指導の工夫を時系列で示したものである。

図８　時系列で示した学習指導の工夫

６　授業の実際

【本時の展開】（１／３時間目）

（１）本時の学習のねらい

＜知識・理解①＞感染症の感染源・感染経路・感受性者の原則について理解することができるようにする。

（２）本時の評価内容

≪知識・理解①≫感染症の感染源・感染経路・感受性者の原則について理解したことを記述している。【観察】【学習ノート】

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ10分	１　オリエンテーション ２　語りと本時の学習内容を確認する。	○授業の意義、授業内で助け合う必要性について説明する。 ○語りと本時の学習内容を伝える。
	【学習内容】　感染症の予防には、感染源・感染経路・感受性者の原則について理解し、新型コロナウイルス感染症の予防について、課題の解決に向けて、互いに意見を伝える。	
	３　アイスブレイク	○アイスブレイクをさせながら、本時の導入につなげる。
なか23分	【発問】（２分）　新型コロナウイルス感染症に感染してしまい、差別や偏見を受けている人が多くいます。なぜ、差別や偏見がうまれるのでしょうか？どうすれば防げるでしょうか？	
	＜予想される反応＞ ・コロナウイルスが怖いから。 ・コロナウイルスがよくわからないから。	○正しい知識があれば差別をなくすことができる。だからこそ、皆で知識を身に付け、生活で活用しようと伝える。
	４　講義【教師の説明】（８分） ○感染症の予防原則について理解する。	○プレゼーテーションソフトで画像や動画を活用し、学習効果を高める。 ○感染症の予防原則について理解させる。
	【課題】　「ウイルス等の飛沫をブロックするための、マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう！」	
	５　課題に取り組む。（３分） ○個人で課題に取り組む。 ６　グループで知恵を出し合う。（５分） ・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。 ７　マスクの効果（５分） ○マスクの効果を理解する。 ○マスクの正しい付け方を実践する。	○取り組んだ課題について、互いに参考となった資料等をもとに知恵を出し合うように伝える。 ・レスキューカードを出して助けてもらうように促す。 ○マスクの効果を理解させる。 ○マスクの正しい付け方を実践させる。
まとめ7分	８　まとめ、振り返り【自己評価】 ○学習ノートを記入する。 ・学習で理解したこと、思考したことをまとめる。	○よい行動について褒める。 ○学習ノートの使い方を説明する。 《知識・理解①》 ・学習ノートに理解したこと、思考したことをまとめさせる。

【授業者としての振り返り】生徒は、いつもと違う環境のため緊張した面持ちだった。しかし、授業冒頭の語りに対して、その内容が生徒の心に入っているように感じた。続いて行った、アイスブレイクをから良い雰囲気になった。また、見える化した教材（グラフ・動画）に対して、集中して見ていた。さらに、課題に対してグループで協力して取り組んでいる姿はとても前向きだった。参観者からも、授業後の研究協議で、生徒が協力して取り組んでいる姿がとても前向きで良かった等の意見があった。しかし、振り返りを記入する時間が短くなってしまった。

【研究の視点からの振り返り】グルーピングを工夫したことで、生徒が安心して学びやすい雰囲気で授業を行えたように感じた。さらに、新型コロナウイルス感染症を見える化教材として扱ったことで、生徒は授業に対して興味・関心が高まっているように思えた。

【本時の展開】（２／３時間目）

（１）本時の学習のねらい

＜思考・判断①＞感染症とその予防について、課題解決を目指して、知識を活用した学習活動等により、総合的に考え、判断し、評価したりする等している。また、それらを説明することができるようにする。

＜知識・理解③＞感染症の予防には、個人及び社会的な対策を行う必要があることについて、理解することができるようにする。

（２）本時の評価内容と評価方法

≪思考・判断①≫感染症とその予防について、課題の解決を目指して、知識を活用した学習活動等により、総合的に考え、判断し、評価したりする等している。また、それらを説明している。【観察】【ワークシート】

≪知識・理解③≫感染症の予防には、個人及び社会的な対策を行う必要があることについて、理解したことを記述している。【観察】【学習ノート】

（３）展開

<table>
<tr><th></th><th>生徒の学習内容・活動</th><th>教師の指導・手立てと評価</th></tr>
<tr><td rowspan="2">はじめ
4分</td><td>1　語りと本時の学習内容を確認する。</td><td>○語りと本時の学習内容を伝える。</td></tr>
<tr><td colspan="2">【学習内容】　感染症の予防対策について、既有知識に新たな知識を加え、事例に対して、社会的対策を考えること。</td></tr>
<tr><td rowspan="6">なか
31分</td><td>2　ブレインストーミング（3分）</td><td>○ブレインストーミングの説明をする。</td></tr>
<tr><td colspan="2">【発問】新型コロナウイルス感染症の予防対策には、どのようなものがありますか？</td></tr>
<tr><td>○対策を次の六つのカテゴリーに分けて記入する。
<table><tr><th></th><th>感染源</th><th>感染経路</th><th>感受性者</th></tr><tr><td>個人的</td><td></td><td></td><td></td></tr><tr><td>社会的</td><td></td><td></td><td></td></tr></table>
3　講義（6分）
○新型コロナウイルス感染症の予防・対策について、日本の対策、神奈川県の対策を理解する。</td><td>○マトリックスで考え、感染症予防の原則についての理解を促す。</td></tr>
<tr><td colspan="2">【課題】　「三つの事例から、一つ選び、それぞれの状況をふまえ、責任者の立場で、新型コロナウイルス感染症の予防対策を考え、提案しよう！」</td></tr>
<tr><td>4　課題に取り組む。（15分）
○個人で課題に取り組む。

○グループで取り組む。
・ホワイトボードに意見をまとめる。

5　各グループが考えた対策を共有する。（7分）
○各グループの提案した対策を評価する。</td><td>○ＩＣＴ機器を活用して、調べるように伝える。
○課題やＩＣＴ機器の使い方がわからない人は、レスキューカードを出して助けてもらうように促す。
○意見を集約し、グループごとに対策をまとめるよう促す。

○ホワイトボードを他のグループに見せながら、どのような対策が出たかを共有させる。
○各グループの提案した対策を評価するよう促す。
《思考・判断①》</td></tr>
<tr><td>まとめ
5分</td><td>6　まとめ、振り返り【自己評価】
○学習ノートを記入する。</td><td>○感染症予防の原則には、個人的及び社会的対策の両輪を動かすことが重要であることについて説明する。
○学習ノートの書き方を説明する。
《知識・理解③》</td></tr>
</table>

【授業者としての振り返り】授業の冒頭の「語り」で前時の取組を褒めたことで生徒の顔が和やになった。難しい課題であったが、グループでチームワークを発揮し、全グループが課題を達成した。

【研究の視点からの振り返り】生徒が学習ノートの意義や効果を感じてきた。前時とは違うグルーピングになったが、課題に対して互いに協力している様子がすべてのグループで垣間見れた。

【本時の展開】（３／３時間目）

（１）本時の学習のねらい

＜関心・意欲・態度①＞感染症とその予防について、課題の解決に向けて、互いに意見を伝える等の学習活動に意欲的に取り組もうとすることができるようにする。

＜知識・理解②＞感染症の発生や流行には、時代や地域によって違いがみられることについて、理解することができるようにする。

（２）本時の評価内容と評価方法

≪関心・意欲・態度①≫感染症とその予防について、課題の解決に向けて、互いに意見を伝える等の学習活動に意欲的に取り組もうとしている。【観察】

≪知識・理解②≫感染症の発生や流行には、時代や地域について違いがみられることについて、理解したことを発言したり、記述したりしている。【観察】【学習ノート】

（３）展開

	生徒の学習内容・活動	教師の指導・手立てと評価
はじめ５分	１　語りと本時の学習内容の確認。	○語りと本時の学習内容を伝える。
	【学習内容】　感染症とその予防について、新型コロナウイルス感染症の死亡者数の今後の推移を考える学習活動に意欲的に取り組むこと。また、結核の流行、時代による違いや、マラリアの流行の地域による違いが見られることを理解し、記述すること。	
なか　30分	２　発問（２分）	
	【発問】　「新型コロナウイルス感染症以外で知っている感染症はありますか？」	
	○プリントに記載されている感染症のうち、聞いたことのある感染症を丸で囲む。 ３　講義（８分） ○感染症は時代によって発生や流行に違いが見られることを理解する。	○新興感染症と再興感染症についての理解を促す。 ○例として結核やマラリアを取り上げ、時代や地域によって発生や流行の違いが見られることを伝える。
	【課題】　「今後、日本の新型コロナウイルス感染症の死亡者数は、どのように推移するか考えよう！」	
	４　課題に取り組む。（８分） ○個人で死亡者減少に有効な対策を考える。 ○グループで今後の死亡者数の推移について検討し、ホワイトボードにグラフを理由とともに書く。 ５　各グループが考えたグラフとその理由を共有（発表）する。（７分） ６　講義（まとめ）（５分） ○これまで学習してきたことを復習する。 ○今後の感染症との向き合い方について理解する。	○ＩＣＴ機器を活用して、調べるように伝える。 ○課題やＩＣＴ機器の使い方がわからない人は、レスキューカードを出して助けてもらうように促す。 《関心・意欲・態度①》 ○互いに伝え合っているなかで、よい行動を紹介する。 ○各グループが考えたことに対し、講評を行う。 ○これまでの授業の意図（生きて働く知識を身に付けてもらいたい）を伝える。
まとめ５分	７　振り返り【自己評価】 ○学習ノートを記入する。	○授業で学んだことを書き出すように伝える。 《知識・理解②》

【授業者としての振り返り】生徒は、最初から最後まで集中していた。授業の流れが今までで一番スムーズであった。何よりも、グループで課題に対して取り組む姿が協力的で素晴らしかった。また、発表をしている姿も堂々としており、変容した姿を授業内で見ることができて感動した。

【研究の視点からの振り返り】見える化した教材、グルーピングを工夫した協働的な学びによる授業が効果的だったと感じた。特に、課題に対してグループで協力する姿が素晴らしかった。そして、学習ノートの振り返りに対する真剣度が高まったように感じた。

7　実態調査の結果

令和２年７月 31 日（金）に、本研究の対象である午前部１年１組の生徒 25 名に対し、保健授業に係る実態調査を行った。

（１）保健授業への興味・関心について

図９は、「保健の授業に興味はありますか」の質問（４件法）に対する回答割合である。

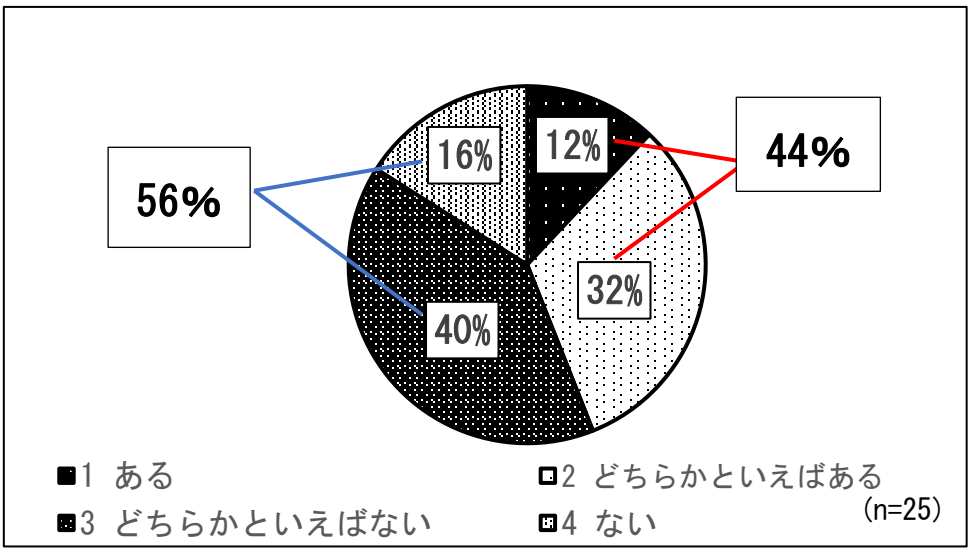


図９　「保健の授業に興味はありますか」に対する回答割合

「ある」と「どちらかといえばある」の肯定的な回答が 44%、「どちらかといえばない」「ない」の否定的な回答が 56%だった。この結果から、保健授業に対して、半数以上の生徒が興味を持っていないことがわかった。

図 10 は、「保健の授業に主体的に取り組んできましたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

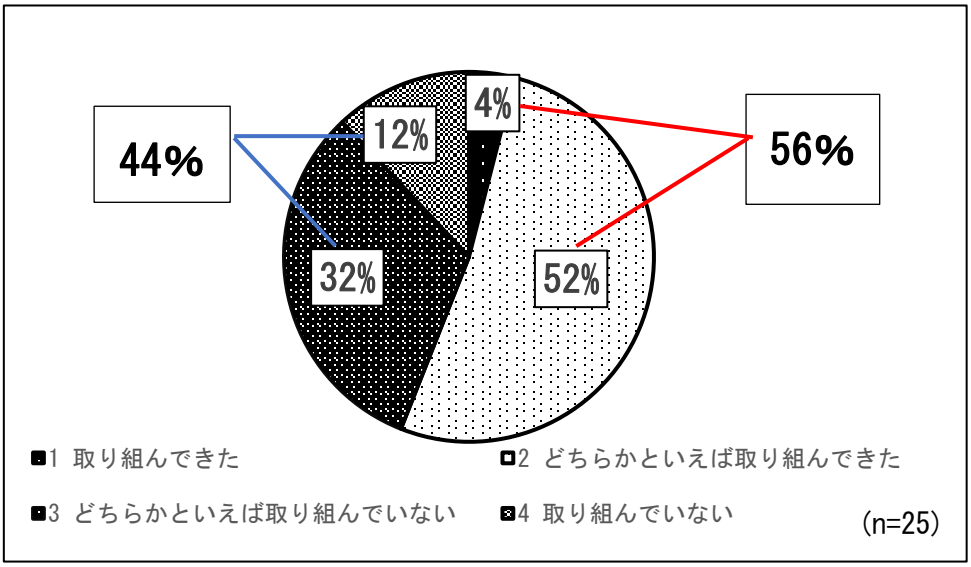


図 10　「保健の授業に主体的に取り組んできましたか」に対する回答割合

「取り組んできた」と「どちらかといえば取り組んできた」の肯定的な回答が 56%、「どちらかといえば取り組んでいない」「取り組んでいない」の否定的な回答が 44%だった。この結果から、保健授業に対して、半数近い生徒が主体的に取り組んでこなかったことがわかった。

（２）対話型授業について

図 11 は、「授業中に、グループ学習やペア学習等でクラスメイトと話すことについて、どのように思いますか。」という質問（４件法）に対する回答割合である。

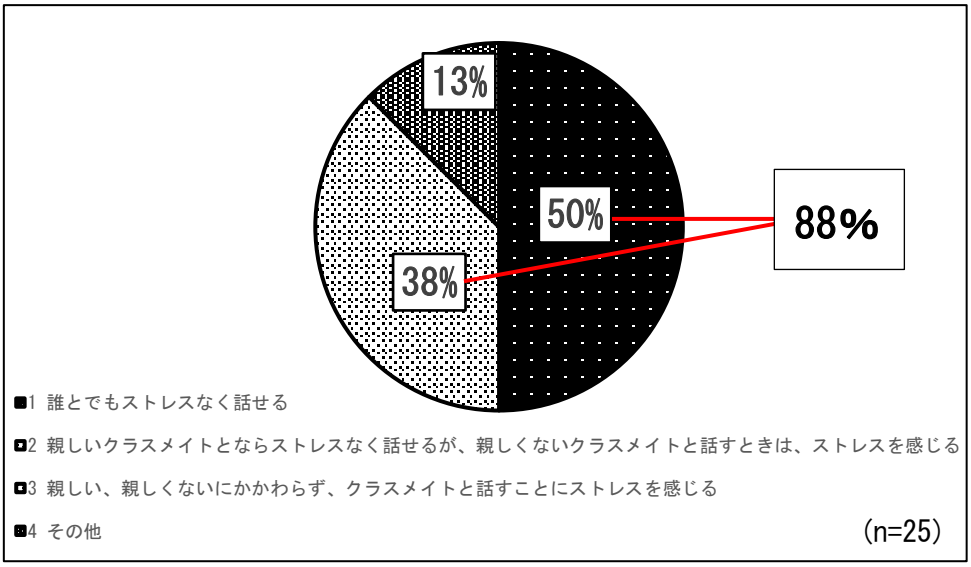


図 11　「グループ学習等でクラスメイトと話すこと」に対する回答割合

「誰とでもストレスなく話せる」「親しいクラスメイトとなら話せるが、親しくないクラスメイトと話すときは、ストレスを感じる」との回答が 88%、「親しい、親しくないにかかわらず、クラスメイトと話すことにストレスを感じる」」「（その他）」の回答が 13%だった。

この結果から、親しいクラスメイトとなら、多くの生徒が話せることがわかった。

実態調査の結果のまとめ

- 保健授業に対して、半数以上の生徒が、興味・関心が低く、半数近くの生徒が主体的に取り組んでこなかったことがわかった。
- 対話型授業について、親しいクラスメイトとなら、多くの生徒が話せることがわかった。

８　検証授業の結果と考察

検証授業で得られたデータを基に、検証の視点に沿って仮説を検証することとした。

検証授業の出席者数は、表７－１のとおり、毎時間の出席者数に偏りがあり、表７－２のとおり、３時間すべて出席した生徒は17名であった。

また、事前・事後アンケートの回収状況は、表７－３のとおりである。

本研究での事後アンケートの分析においては、２時間以上の出席者 23 名（表７－２参照）のデータを対象とし、事前・事後アンケートの比較においては、２時間以上の出席かつ、事前・事後の両方に回答している者23名（表７－３参照）のデータのみを対象とした。

続いて、本研究においては、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」の４件法によるアンケートの結果において、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」を合わせて「そう思う群」、「どちらかといえばそう思わない」、「そう思わない」を合わせて「そう思わない群」と表記し、グラフには数値を太枠で囲むこととする。そして、本研究において、４件法と表記する場合の選択肢は、上記選択肢を意味することとした。

なお、質問項目に対し、未記入の場合等もあるため、図表には、その都度ｎ数を記入した。

また、割合（%）を示しているグラフについては、小数点以下を四捨五入しているため100%にならない場合がある。文中の生徒の記述内容や発話内容ついては、誤字・脱字を除き、生徒が記述したままの表現で掲載した。太字、下線は自身が加筆した。

表７－１　検証授業の出席者数

	１時間目	２時間目	３時間目
１年１組（34名）	19名	25名	22名

表７－２　単元における出席時数別の人数

３時間すべて出席	17名
２時間出席	６名
１時間出席	２名

表７－３　事前と事後のアンケート回収状況

事前回収数 （内、２時間以上の出席者）	事後回収数 （内、２時間以上の出席者）
27名（23名）	27名（23名）

（１）生徒は授業をどのように捉えたか

ア　「保健授業の評価票」の結果について

「生徒は授業をどのように捉えたか」を把握するため、七木田が作成した中学校用の「保健授業の評価票」（p. ８表３参照）の項目から抜粋した、五つの質問に、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の３段階で、生徒に授業を評価してもらった。

また、各項目の回答を「はい」を３点、「どちらでもない」は２点、「いいえ」は１点として、クラスごとに各質問の毎時間の平均を算出し、それを評価観点の得点とし、表８に示した。

表８　「保健授業の評価票」による授業評価の結果

評価観点	質　問	１時間目	２時間目	３時間目	平均
意欲	１. 自分からすすんで、勉強することができた。	2. 53	2. 53	2. 82	2. 63
興味・関心	２. 今日の勉強に興味をもち、ほかの関係することについても調べてみようと思った。	2. 41	2. 70	2. 70	2. 60
有益性	３. 今日勉強したことは、これからの生活に活かすことができるだろう。	2. 94	2. 94	3. 00	2. 96
認識	４. 意外な事実を知った。	2. 18	2. 35	2. 41	2. 31
協力	５. 友だちと助け合って、学習できた。	2. 70	2. 70	2. 82	2. 74
平　均		2. 55	2. 64	2. 75	2. 65

(n=17)

図 12 は、「保健授業の評価票」における各時間の評価観点ごとの平均値（表８参照）をグラフ化したものである。

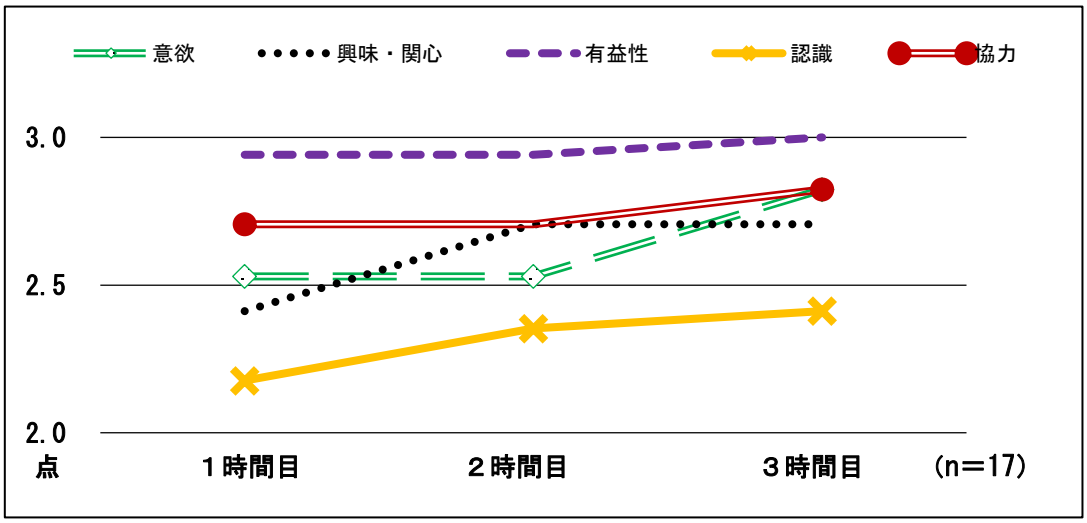


図 12　「保健授業の評価票」における毎時間の評価観点ごとの平均値の推移

図 12 の各観点の１～３時間目の平均点を見ると、「認識」以外の評価が 2.31 点と他の観点が高かったのに比べて低い傾向であった。この原因は現在流行している新型コロナウイルス感染症について、テレビやＳＮＳで毎日のように情報が発信され、「認識」の質問事項である、「意外な事実を知った」ということが授業内でそれほど無かったのではないかと考えられる。

また、「有益性」の評価点がすべての授業で高かった。特に、３時間目はすべての生徒が「はい」と回答し 3.00 点の満点となった。これは、自分の身近なところで、新型コロナウイルス感染症が高校生の生活にも多大な影響を及ぼしていることから、勉強したことを生活にいかせるだろうと考えたことによるものと思われる（p.33 表 11 参照）。

さらに、「協力」の評価点もすべての授業で高かった。１時間目から３時間目にかけて上昇した。これは、グループ活動に慣れていったことが原因だと考えられる。

そして、どの評価観点も１時間目より３時間目が高く、中でも「意欲」と「興味・関心」が 0.29 点と大きく上昇した。これは、後述する（p.34 参照）３時間目のグラフを活用して考える見える化教材の効果などが、原因として考えられる。

イ　「語り」をどのように捉えたか

生徒の内発的動機付けを高め、授業に意欲的に参加できるように語りを行った。図 13 は、事後アンケートの「授業の最初に教師の『語り』を聞くことで、授業に対する意欲が高まりましたか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

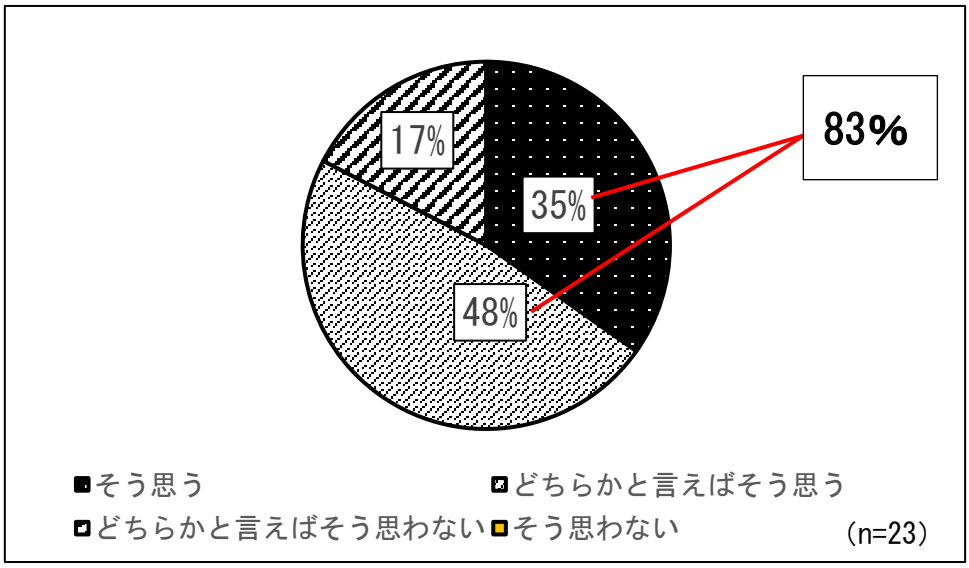


図 13　「授業の最初に教師の『語り』を聞くことで、授業に対する意欲が高まりましたか」に対する回答割合

図 13 を見ると、「そう思う」と回答した生徒が 35%、「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒が 48%であり、「そう思う群」が 83%を占め、概ねの生徒が「語り」を聞くことで、授業に対する意欲が高まったと考えられる。

しかし、17%の生徒は「どちらかといえばそう思わない」と回答した。これは、「語り」の内容である、授業の意義を分かりやすく伝えられなかったことが原因だと考えられる。

（１）「生徒は授業をどのように捉えたか」のまとめ

・生徒による授業評価は、授業を重ねるごとに高まり、中でも「有益性」が高い評価であった。
・本研究で重点を置いた「興味・関心」は３時間目に評価が大きく上昇した。
・授業に対する内発的動機付けを高めるための「語り」は、意欲喚起に貢献できたと考えられる。

（２）生徒は新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用をどのように捉えたか

図 14 は、事後アンケートの「見える化した教材（静止画・動画・図表・グラフ・表）はわかりやすかったですか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

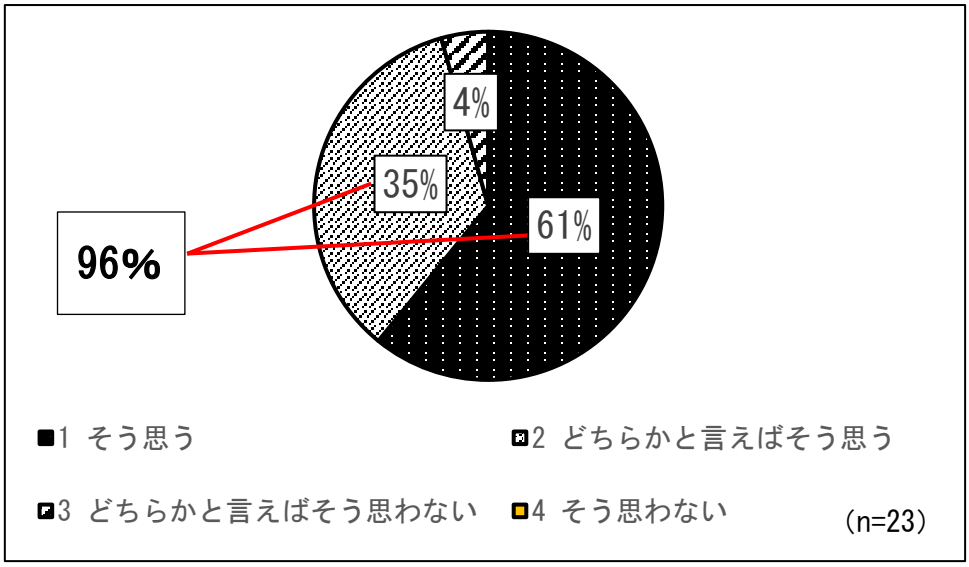


図 14　「見える化した教材（静止画・動画・図表・グラフ・表）はわかりやすかったですか」に対する回答割合

図 14 を見ると、「そう思う群」が 96%を占めており、ほぼすべての生徒が見える化した教材はわかりやすかったと認識している。

実際の授業では、プロジェクターでスライドを大きく投影した。そのため、視覚にもインパクトを与えたことがわかりやすさにつながったのではないかと考える。

また、ウイルスや細菌の大きさを図として示すことで、目には見えないけれど、こんなにも小さいものかと実感できたため、感染予防が必要であると生徒は感じていたと考える。

さらに、飛沫がどのように飛んでいるかを見える化した動画を視聴することにより、マスクの有効性を感じることができたと同時に、教材が生徒にとってわかりやすいものであったと考えられる。

表９は、事後アンケートの「授業前に配信した動画を１度でも見た人は、その感想を書いてください。」という質問に対する自由記述である。

表９　「授業前に配信した動画を１度でも見た人は、その感想を書いてください。」（自由記述）に対する回答（一部抜粋）

生徒Ａ **予習（動画）を見ることで授業の内容が分かりました。**
生徒Ｂ 普段の授業では無いことなので、その動画について興味を持てた。**すべての動画、とてもわかりやすく便利だった。**
生徒Ｃ 動画を見てから、うけた授業も、見ないでうけた授業も学べましたが、**見てからうけた授業の方がより学べた気がしました。**
生徒Ｄ **事前に動画を見ることによって授業の内容についていけました。**
生徒Ｅ 事前にどんなことを行うのかが分かるので**授業に取り組みやすかったです。**
生徒Ｆ 動画の時間がそんなに長くなかったので、通学中電車のなかで見たり、授業前に見たりしやすかったです。動画を見ていて、**「あ、これ調べてみようかな」等、思えたところもいくつかありました。**

（肯定的な感想が17名中16名。否定的な感想が17名中１名）

表９を見ると、記入のあった 17 件ほとんどが肯定的な回答であり、事前動画が有効だと記述している。

生徒Ｅの感想では、「事前にどんなことを行うのかが分かるので授業に取り組みやすかったです」と回答しており、事前動画を見ることによって、授業に取り組みやすくなったことがうかがえる。また、生徒Ｆは、「動画の時間が長くなかったので、通学中電車のなかで見たり」と回答しており、動画の時間を５分前後にしたことで通学途中の隙間時間でも事前動画を見ながら予習できたと考えられる。

以上のことから、事前動画は生徒にとってわかりやすいものであったと考えられる。

表10は、事後アンケートの「授業前に配信した事前動画を見ましたか」という質問における回答割合である。

表10　「授業前に配信した事前動画は見ましたか」に対する回答割合

	視聴率(n=23)
１時間目	83%(配信日は授業の６日前)
２時間目	65%(配信日は授業の２日前)
３時間目	61%(配信日は授業の２日前)

表10を見ると、１時間目が83%、２時間目が65%、３時間目が61%であった。１時間目に比べて、２・３時間目に視聴率が下がっているが、その原因としては、配信するタイミングが授業の直前になってしまったことが考えられる。

以上のことから、事前動画は、ほとんどの生徒が肯定的に捉えていたことがわかり、生徒に興味・関心を持たせる手立てになったと考えられる。

表 11 は、事後アンケートの「感染症とその予防の授業で、教科書には載っていない新型コロナウイルス感染症を扱ったことについての感想を書いてください。」という質問における自由記述の回答である。

表 11「感染症とその予防の授業で、教科書には載っていない新型コロナウイルス感染症を扱ったことについての感想を書いてください。」（自由記述）に対する回答（抜粋）

生徒Ｇ 新型コロナウイルスについて、あまり知らなかったことを知れてもう一度**ふだんの生活を見直そうと思いました。**
生徒Ｈ 僕が知らない感染症について触れていたので、こんな感染症もあったんだ！と思い、**改めて色々な感染症を知ることが出来ました。**
生徒Ｉ 難しいところはあったけど、**グループでやることによって色々な発見等があってよかった。**
生徒Ｊ **教科書よりわかりやすかった。**コロナについて理解できた。
生徒Ｋ 身近で一番気になっていた事なので分かりやすく助かった。
生徒Ｌ **今まさに流行している病気について、ＳＮＳ等ではなく学校でしっかりと学ぶことができて良かった。**
生徒Ｍ テレビ等でよく見ていたのですが、同じような情報しか聞いたことがありませんでした。授業では先生方やクラスメイトのいろんな意見がきけたのでたくさん学べてよかったです。**コロナウイルスのことを授業で取り上げてくれたことが良かったです。**
生徒Ｎ 今実際にいろいろな所で新型コロナについて扱われているので、**感染対策の意識、感染症に対する知識が得れました。**これらのことがあり、**家族と感染症について、話す機会も得られたので良かったと思います。**

表 11 について、記入のあった 15 件すべてが肯定的な回答だった。特に、生徒Ｊの回答で「教科書よりわかりやすかった」については、教材がわかりやすかった点や見える化した教材にしたことで、上記の回答につながった。また、生徒Ｎの回答で「家族と感染症について、話す機会も得られたので良かったと思います」は、授業で学んだことを実生活でいかそうとしている姿がうかがえた。

このことから、新型コロナウイルス感染症を授業で扱ったことは、生徒の興味・関心を持たせることにつながったと考えられる。

図 15 は、毎時間行った学習ノートの自己評価において、「今日の課題は、考えてみたくなる内容だと思いますか。」の項目について、４件法で回答した結果の割合を表したものである。

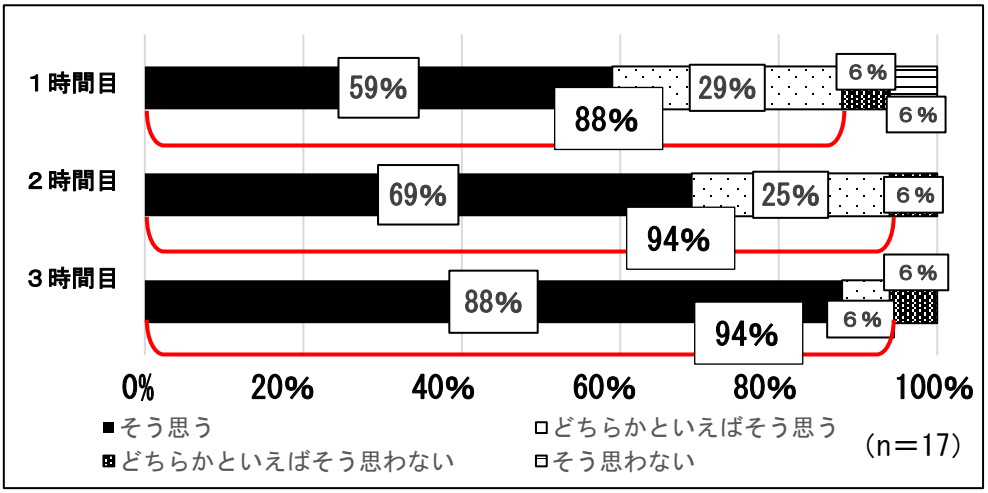


図 15　「今日の課題は、考えてみたくなる内容だと思いますか。」に対する毎時間の回答割合（４件法）

図 15 を見ると、すべての時間で、課題に対し、肯定的な回答が多かったことがわかった。

このことは、現在流行している新型コロナウイルス感染症を教材として扱ったことで、課題に対して考えてみたくなったのではないかと考えられる。

また、「そう思う」と回答している割合が授業を重ねるにつれ伸びている。課題の難易度を高めたことで、生徒の課題に挑戦する意欲が高まったことが要因だと考えられる。

特に３時間目の課題に対しては、これまでで最も集中している様子が見受けられた。

難しい課題であったものの、事前の講義で結核死亡率のグラフが推移している理由を学び、具体的にどのような対策を講じることで新型コロナウイルス感染症の死者数を減少させることができるかを考えていく教材としていた。

以上のことから、生徒にとって考えてみたくなる課題とは、現在流行している新型コロナウイルス感染症等、授業で学んだことが実生活でいかされる課題の内容であり、適切な難易度の課題であったことも考えてみたくなる要因であったと考えられる。

（２）「生徒は新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用をどのように捉えたか」のまとめ

- ほぼすべての生徒が見える化教材が分かりやすかったと感じていたため、理解の促進につながったことが考えられる。
- 授業前に配信した動画は、動画を見た生徒はほぼ全員が肯定的に捉えていたことから、授業に興味・関心を持たせることにつながったと考えられる。
- 教科書には載っていない新型コロナウイルス感染症を扱ったことは、概ねの生徒が肯定的に捉えていたことから、授業に興味・関心を持たせることにつながったと考えられる。
- 生徒にとって考えてみたくなる課題とは、現在流行している新型コロナウイルス感染症等、授業で学んだことが実生活でいかされる課題の内容であるとともに、生徒にとって適切な難易度のものであると考えられる。

（３）生徒はグルーピングをどのように捉えたか

図 16 は、事後アンケートの「今回のグループは取り組みやすかったですか」という質問（４件法）に対する回答割合である。

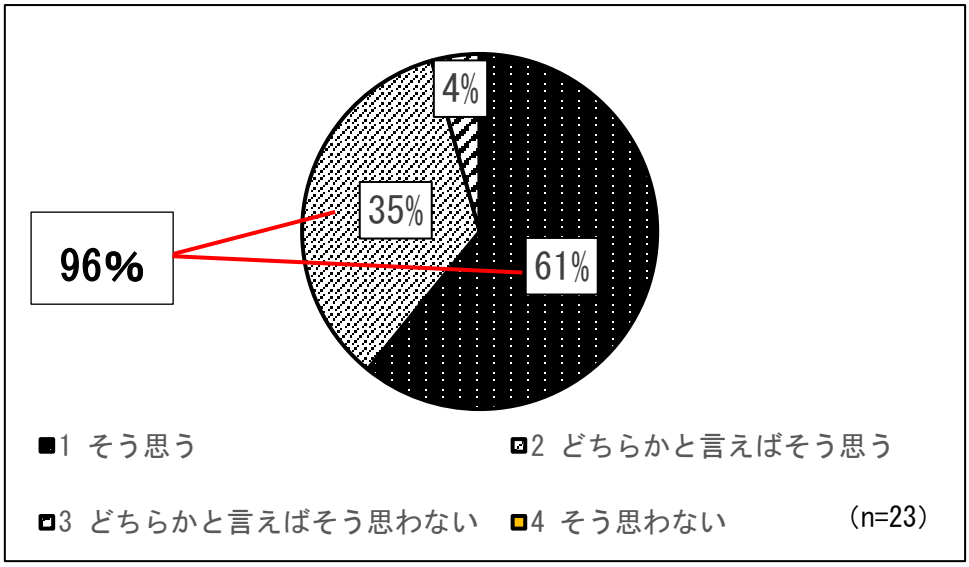


図 16　「今回のグループは取り組みやすかったですか」に対する回答割合

図 16 を見ると、「そう思う群」が 96%（22 名）を占めている。このことから、ほぼすべての生徒が本研究のグルーピングに対して肯定的にとらえたことがわかった。

要因としては、グルーピングのポイント（p. 16 参照）が、生徒にとって取り組みやすいグループになったと考えられる。

表 12 は、事後アンケートの「今回のグループは取り組みやすかったですか」、「なぜ、そのように思いましたか」（自由記述）に回答した 19 件の中で、グルーピングのポイントに該当する回答（例:①よく話す子がちょこっといたので話しやすかったからです。②仲の良い人と取り組むと話がすすむし、話しやすい。）をした人数を表した表である。

表 12　自由記述における、グルーピングのポイント（p. 16（２）ア）に該当する回答人数

グルーピングのポイント	回答人数
①話合いが得意な生徒と苦手な生徒を同じグループにする。	４名
②話しやすい関係性を重視したグループにする。	５名
③出欠席に偏りが出ないグループにする。	０名

自由記述（19 件）の内、18 件が「そう思う群」であり、表 12 を見ると、①と②が全自由記述の半数を占めていることから、「そう思う群」の半数の生徒には、本研究で示したグルーピングのポイントは効果的だったと考えられる。

その他の回答には、「席が向かい合っているから」、「イスの並びも顔がみやすくなっており、授業の雰囲気も取りくみやすかった」などがあった。

このことから、本研究の学習環境が取り組みやすいグループにつながったと考えられる。

表 13 は、事後アンケートの「今回のグループは取り組みやすかったですか」という質問に対し、「なぜ、そのように思いましたか」（自由記述）に回答した生徒の回答理由の抜粋である。

表 13　「今回のグループは取り組みやすかったですか」に対して「なぜ、そのように思いましたか」（自由記述）の回答（抜粋）

生徒Ｏ **仲の良い人と取り組むと話がすすむし、話しやすい。**
生徒Ｐ **よく話す子がちょこっといたので話しやすかった**からです。

表 13 を見ると、今回のグループが取り組みやすかった理由として、話合いが得意な生徒を各グループに配置したことや、良い関係性を重視したグループにしたことが有効だと感じていたことが記述からわかった。

図 17 は、毎時間行った学習ノートの自己評価において、「自分の考えを相手に伝えることができた」「グループの仲間の考えを理解することができましたか」という質問（３件法）における回答割合である。

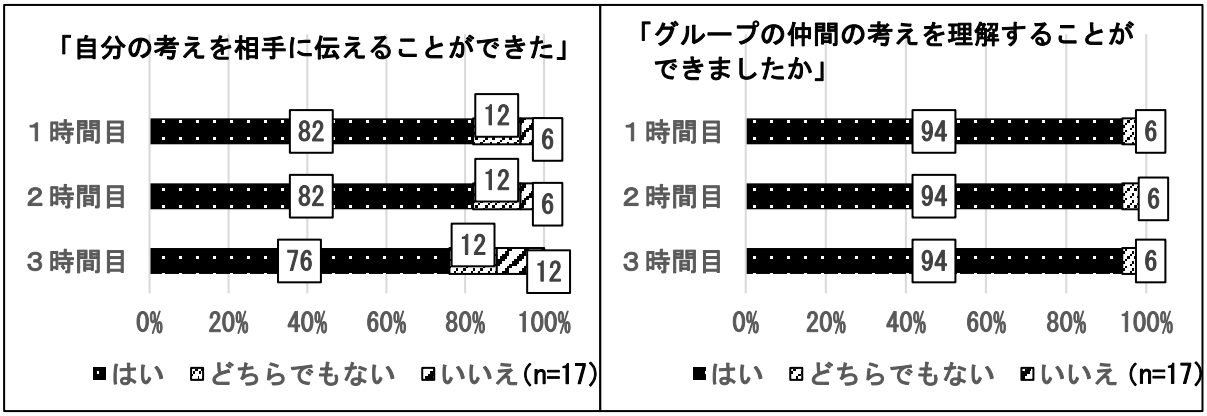


図 17　「自分の考えを相手に伝えることができた」「グループの仲間の考えを理解することができましたか」に対する回答割合の推移

図 17 を見ると、両回答ともに肯定的な回答が多かったことがわかった。「自分の考えを相手に伝えることができた」については、３時間目に「はい」と回答した割合が６ポイント下がった。その原因は「いいえ」と回答した生徒が２人いたことで下がったと考えられるが、詳しい理由はわからなかった。また、「グループの仲間の考えを理解することができましたか」については、グループ活動を行う前にグループ内で意見交換を行うポイント（p. 16（２）イ参照）を伝えたことが有効だったと考えられる。

（３）「生徒はグルーピングをどのように捉えたか」のまとめ

・多くの生徒が、自分の考えを相手に伝えることができたことや、グループの仲間の考えを理解することで、グルーピングを肯定的に捉えていたことがわかった。

（４）授業（課題）に興味・関心を持てたか

ア　興味・関心を持って授業に取り組めたか

図 18 は、事前・事後アンケートの「これまでの保健（中学校・高校）の授業に対して興味・関心が持てましたか」という質問（４件法）における回答割合である。

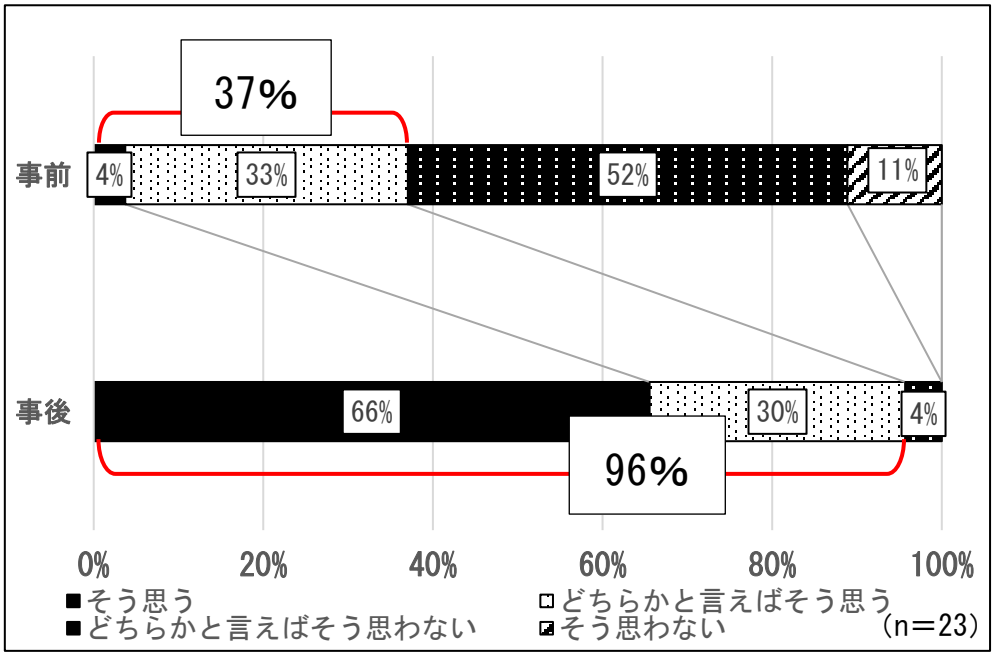


図 18　「これまでの保健（中学校・高校）の授業に対して興味・関心が持てましたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

図 18 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の 37%から事後では 96%と 59 ポイント上昇した。今回の保健授業の授業を通して、ほぼすべての生徒が、今回の保健授業に興味・関心を持って授業に取り組んだことがわかった。

表 14 は、事前・事後アンケートの「これまでの（中学校・高校）／今回の保健の授業に対して興味・関心が持てましたか」という質問における回答割合の推移である。

表 14「これまでの保健（中学校・高校）の授業に対して興味・関心が持てましたか」に対する回答割合の事前・事後の推移の内訳

「４（そう思う）」「３（どちらかといえばそう思う）」「２（どちらかといえばそう思わない）」「１（そう思わない）」

４➡４	１名（４%）	３➡４	７名（30%）	２➡４	６名（26%）	１➡４	１名（４%）
４➡３	０名	３➡３	０名	２➡３	５名（21%）	１➡３	２名（８%）
４➡２	０名	３➡２	０名	２➡２	１名（４%）	１➡２	０名
４➡１	０名	３➡１	０名	２➡１	０名	１➡１	０名

表 14 を見ると、「どちらかといえばそう思う」から「そう思う」に推移した人数が 7 名（全体の 30%）と最も多かったことがわかった。これは、学習指導の工夫である、事前動画や授業通信等が効果的であったことや、新型コロナウイルス感染症を授業で扱ったことが今回の保健授業に興味・関心が持てたのではないかと考えられる。

表 15 は、特に顕著な変容が見られた生徒Ｑの回答の変化を表したものである。

表 15　生徒Ｑの「感染症」に対する回答の変化

	質　問	回　答
実態アンケート調査	授業で『感染症』について、どのようなことを学びたいですか。	あまり興味がわかない。
事後アンケート調査	今回の保健の授業は、現在の生活や今後の生活に役に立つ内容でしたか。	コロナとか、これからについて役に立つと思ったから。
３時間目の授業振り返り	これまでの感染症とその予防の授業で、「学んだこと」を書いてください。	感染症は怖いものだけれど、対策を考えていくことで、共存していくことができるのではないかと思いました。今回は、とても興味深かったです。

表 15 を見ると、生徒Ｑは、授業前のアンケート調査で感染症に対して「あまり興味がわかない」と回答したが、授業を通じて、興味が高まったことがわかった。このことは、新型コロナウイルス感染症を中心教材としたこと、グループで課題に取り組んだことで、興味・関心が高まっていったのではないかと考えられる。

図 19 は、事前・事後アンケートの「これまでの／今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか」という質問（４件法）における回答割合である。

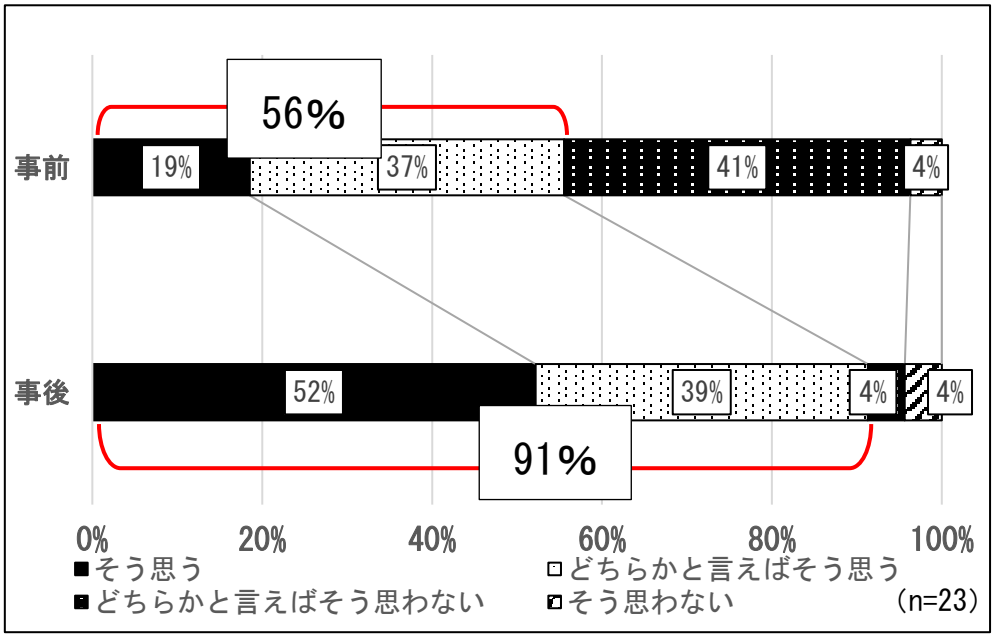


図 19　「これまでの／今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

図 19 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の 56%から事後では 91%と 35 ポイント上昇した。今回の保健授業を通して、多くの生徒が、保健授業に意欲的に取り組んだことがわかった。

表 16 は、事前・事後アンケートの「これまでの／今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか」という質問における回答割合の推移である。

表 16　「これまでの／今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか」に対する回答割合の事前・事後の推移の内訳

「４（そう思う）」「３（どちらかといえばそう思う）」「２（どちらかといえばそう思わない）」「１（そう思わない）」

４➡４	４名（17%）	３➡４	５名（21%）	２➡４	３名（13%）	１➡４	０名
４➡３	１名（４%）	３➡３	３名（13%）	２➡３	２名（８%）	１➡３	３名（13%）
４➡２	０名	３➡２	０名	２➡２	１名（４%）	１➡２	０名
４➡１	０名	３➡１	０名	２➡１	１名（４%）	１➡１	０名

表 16 は、「これまでの／今回の保健の授業に意欲的に取り組みましたか」に対する事前・事後の推移の結果である。「どちらかといえばそう思う」から「そう思う」に推移した人数が５名（全体の 21%）と最も多かったことがわかった。

これは、保健の授業に対して、興味・関心が高まったことにより、今までより意欲的に取り組めるようになったと考えられる。

表 17－１は、学習ノートの振り返り「もっと知りたい」「もっと調べたい」（１時間目）に対する生徒の自由記述の抜粋である。

表 17－１　「もっと知りたい」「もっと調べたい」に対する回答（抜粋）（１時間目）

生徒Ｒ マスクの種類は多くあり、その中でも自分に合ったサイズを見付けることが大事だと知れました。**もっと予防についてくわしく知りたいです。**
生徒Ｓ 布マスクと不織布マスクの違いを見たから、ほかの Ｎ９５やネックゲイター等の違いを**知りたいと思った。**
生徒Ｔ コロナウイルスについてもっと知ってみたいなとあらためて思いました。なぜかというと自分がもし、コロナにかかってしまった時にまわりをめいわくさせてしまうので**予防等もいろいろ知りたいです。**
生徒Ｕ これからもマスクを着ける機会は多いと思うので、どの様なマスク、又はその着け方が効果があるのか等について**知りたいと思った。**
生徒Ｖ N95 マスク等、マスクにも色々な種類があって、その**マスクの性能等をもっとしっかり理解したいと思いました。**

表 17－１を見ると、生徒Ｔ以外の回答は「マスク」に関する記述が目立った。このことは、授業の課題が「ウイルス等の飛沫をブロックするための、マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう！」であったために、生徒が授業を振り返ったときに「マスク」の印象が強かったと考えらえる。

表 17－２は、学習ノートの振り返り「学んだこと」「理解したこと」（２時間目）に対する生徒の自由記述の抜粋である。

表 17－２　「感染症の対策について」に対する回答（抜粋）（２時間目）

生徒W 個人や社会的対策はどちらもマスクや消毒を重要視していることがわかった。あるお店では新しいマスク、しゃべれる君を作ったりして対策していることがわかった。
生徒Ｘ 今日の授業では、グループの意見等を聞いて、そういう考えがあるのか等を知ることができました。そして立場を変えて、またいろんなことを知れるということを学びました。

表 17－２を見ると、生徒Wは「個人や社会的対策はどちらもマスクや消毒を重要視していることがわかった」と回答しており、社会的対策を考えたことによって、個人の対策とつながっていることを理解したことがわかった。また、生徒Ｘは「立場を変えて、またいろんなことを知れるということを学びました」と回答しており、校長先生や、カラオケ店の店長の立場で社会的対策を考えたことで、いろいろなことを知ることができたということがわかった。

イ　興味・関心を持って課題に取り組めたか

「興味・関心を持って課題に取り組めたか」を検証するため、課題（p.19 表6参照）に取り組む際の各グループの発話記録から課題への取り組みを分析することとした。

毎時間のグループ数や、グループのメンバーに関しては、すべての授業で欠席者がいるため、毎時間異なることとなった。１時間目は、男女２グループずつの計４グループとなり、２・３時間目は、男子が２グループ、女子が３グループの計５グループとなった。また、３時間目のグループ編成で、遅れて授業に参加する生徒がいる可能性があったため、男子３班を残しておいたが、欠席したため３班以外の５つの班で課題に取り組んだ。

（ア） １時間目の課題について

表 18 は、１時間目の課題「ウイルス等の飛沫をブロックするための、マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう！」に対しての各班の回答である。

表 18　課題に対しての各班の回答（１時間目）

「ウイルス等の飛沫をブロックするための、マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう！」					
	１位	２位	３位	４位	５位
１班	N95 マスク	サージカルマスク	布マスク	首に着用する衣類	バンダナ
２班	N95 マスク	サージカルマスク	布マスク	バンダナ	首に着用する衣類
３班	N95 マスク	サージカルマスク	首に着用する衣類	布マスク	バンダナ
４班	N95 マスク	サージカルマスク	布マスク	首に着用する衣類	バンダナ
正解	**N95 マスク**	**サージカルマスク**	**布マスク**	**首に着用する衣類**	**バンダナ**

表 18 を見ると、１班と４班が課題に対して正答であった。

図 20 は、１時間目の課題「実際に授業で使用したランキング表」である。

図 20　実際に授業で使用したランキング表

図 20 の課題に対して、始めに個人の取り組む時間は３分とした。短い時間であったが、生徒は事前の講義を参考にしたり、ＩＣＴ機器で調べたりしながら、課題に取り組んでいた。次に、グループで考えをまとめる時間は６分とした。教師の「番号の若

い人から順番に自分の考えを伝えてください」という指示を受けて、各グループで順々に自身の考えを伝え合っていた。

生徒にとって、簡単な課題ではなかったと思うが、グループで協力しながら課題に取り組んだことで、半分のグループが正答になったことが考えられる。また、４班はグループで意見を伝え合っているなかで、ＩＣＴ機器で課題を調べていた生徒が「これ、一緒じゃない」と、課題の参考にしたマスクのランキング表「マスクの種類による飛沫の濾過効果の違いを見た研究」を探しあてていた。

以上のことから、１時間目の課題に対して、前向きに取り組んでいたことがわかった。

つまり、課題に対して、興味・関心を持って取り組んだ結果だと考えられる。

（イ）２時間目の課題について

表 19 は、２時間目の課題「三つの事例から、一つ選び、それぞれの状況をふまえ、責任者の立場で、新型コロナウイルス感染症の予防対策を考え、提案しよう！」に対す各班の回答である。

表 19　課題に対しての各班の回答（２時間目）

	「三つの事例から、一つ選び、それぞれの状況をふまえ、責任者の立場で、新型コロナウイルス感染症の予防対策を考え、提案しよう！」
1班	○カラオケ店の店長 ＜提案＞マイクにカバーを付けて、飛沫感染を防ぐ
2班	○校長先生 ＜提案＞密を避ける、ソーシャルディスタンスを行う
3班	○カラオケ店の店長 ＜提案＞清掃、除菌の徹底
4班	○校長先生 ＜提案＞分散登校
5班	○校長先生 ＜提案＞感染経路を防ぐため、マスクの着用

表 19 の課題に対して、５分間、個人で考え、配付された５枚の付箋に提案を記入した。次に、グループの代表が記入した付箋を木のボードに貼った。その後、教師から「時間に余裕があれば、付箋をカテゴリー別に分けてみましょう」と伝えたが、既にグループによっては、カテゴリー別に分けていた。そして、個人で出した付箋をグループで意見交換をしながら、グループの提案をまとめていった。本来は、グループで考え、まとめる時間を 10 分と計画していたが、講義の時間が予定より長くなってしまい、グループで考えをまとめる時間は５分とした。短い時間になったが、互いの意見を尊重しながら、各グループで提案をまとめていた。

以上のことから、２時間目の課題に対して興味・関心を持って取り組めたことがわかった。

（ウ） ３時間目の課題について

図 21－１から図 21－５は、３時間目の課題「今後、日本の新型コロナウイルス感染症の死亡者数は、どのように推移するか考えよう！」に対して各班が作成したグラフである。

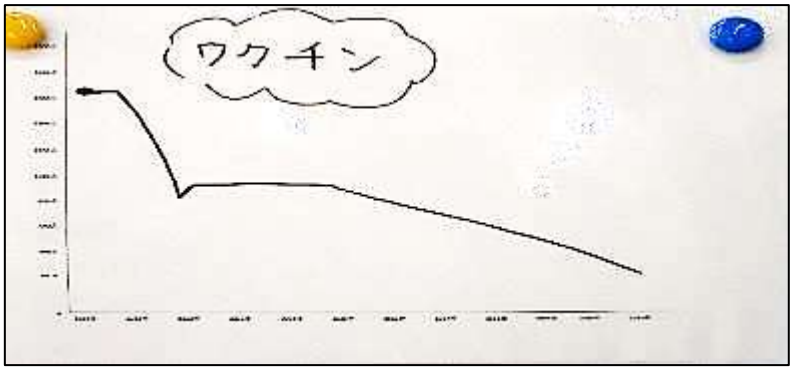


図 21－１　＜１班が作成したグラフ＞

図 21－１については、グループ内で話合っている序盤は「難しいなぁ」等の発言があった。しかし、「やっぱり、ワクチンだよね」という発言から、課題に対しての意見交換が活発になった。そして、意見交換を繰り返しながら、「2021 年にワクチンはできるけど、一旦、その後に下がるけど、やっぱりコロナウイルス感染症がその後も一向に減らないで安定期に入って、増えるも減らないで変わらない」と発表をした。

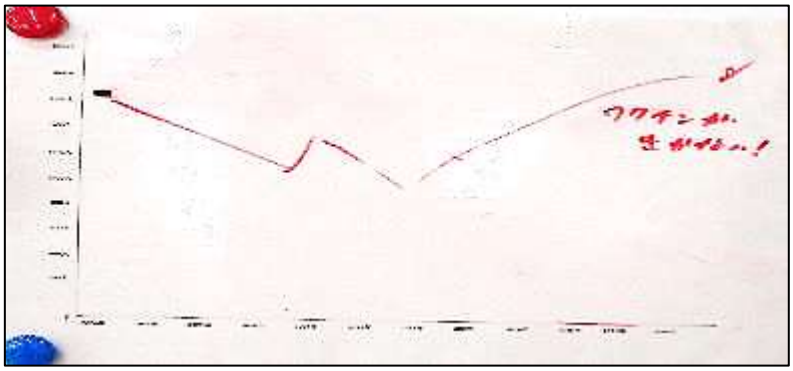


図 21－２　＜２班が作成したグラフ＞

図 21－２については、話合いの序盤に「もうちょっと時間、欲しいなぁ」等の発言があった。そこで、自分の考えをグラフを書けている生徒に対して、教師から「これだけ書けてたら凄いよ。想像でいいんだよ。」という声かけによって、「まずは減らすこと（感染者）」、という発言がうまれた。その後、「ワクチンが効かない」等の発言があった。話合いの終盤で、「ワクチンが効かなかったらでいい？」の発言に対して「こういう班があってもいいじゃん」等の同調する発言があり、グループの皆が納得した話合いになっていたことがわかった。そして、「ワクチンが効かなくて、また増えてしまう」と発表をした。

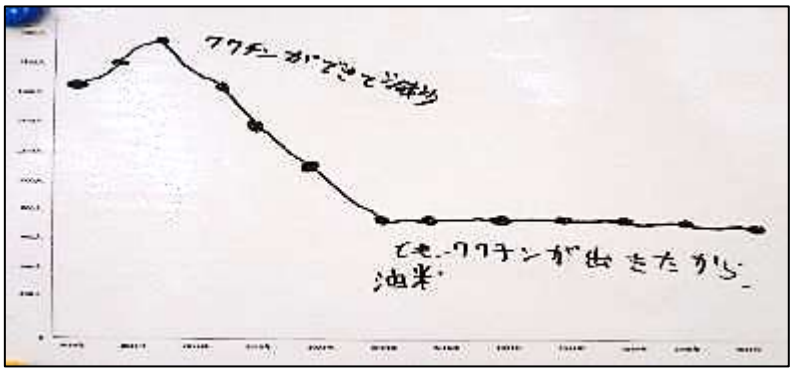


図 21―３　＜４班が作成したグラフ＞

図 21－３については、話合いのほとんどがワクチンに関することだった。そのような話合いのなか「なんかウイルスって弱まっていくって聞いたことがある」等のニュースなどで得た既有知識を活用して発言している場面も見受けられた。話合いの中盤では「私はちょっと下がった後に油断して、また上がると思う」等の発言があり、「それはあるそれはある」や「そういうところ日本人あるから」等の発言から、グループの意見として「ワクチンができて下がるけど、油断して停滞するけど、下がっていく」と発表をした。

図 21―４　＜５班が作成したグラフ＞

図 21－４については、序盤の話合いの中で「１回さ上がるのは何でだと思う？」や「どんな感じにした？」等、他者の意見を引き出す発言が垣間見られた。話合いの序盤でそのような発言があったことで、活発な意見交換が繰り広げられたと感じている。また、５班は個人で考えたグラフが似ているようだった。そのため、話合いの中盤で「ジグザグ系で大丈夫？」の問いかけに対して、他のメンバーが「うん」と同調していた。そして「ワクチンができた途端に減少するけど、ワクチンができたことによって安心して、また増加する。それを繰り返す。」と発表をした。

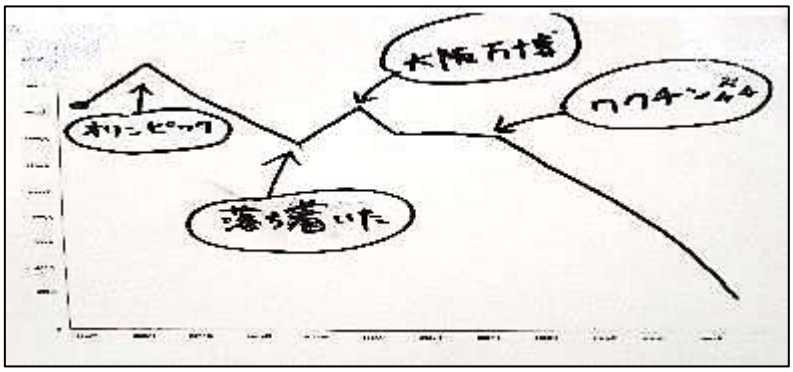


図 21―５　＜６班が作成したグラフ＞

図 21－５については、世界規模のイベントを軸に話合いが進んでいった。話合いの序盤で、東京オリンピックについて、話合いの中盤で大阪万博についての発話があった。東京オリンピックについては「オリンピックは確実に上がると思う」や「感染対策って言っても、限られているじゃん」等の発言があり、対策を講じても死者数は上がるだろうと話合いは進んでいった。大阪万博も同様に、対策を講じても死者数は上がるだろうと話合いは進んでいった。そして、「2021 年にオリンピックで上がって、24 年ぐらいにオリンピックのが落ち着いて、2025 年に大阪万博でまた上がって、そこからちょっと下がって 26 年ぐらいから安定して、ワクチンができあがって、段々と下がる」と発表をした。

以上のように、各グループの話合いでは、今後の死者数の推移については「ワクチン」がキーポイントになっていた。３時間のなかで最も難しい課題であったものの、事前の講義で学んでいた結核のグラフを参考にしたことで、グラフを作成することができたと感じた。

以上のことから、３時間目の課題に対して各グループが興味・関心を持って課題に取り組めたことがわかった。

（４）「授業（課題）に興味・関心を持てたか」のまとめ

- ほぼすべての生徒が、今回の保健授業に興味・関心を持ち授業に取り組めたことがわかった。
- 多くの生徒が発話分析によって、意欲的に取り組んだことがわかった。
- ほぼすべての生徒が発話分析によって、興味・関心を持って課題に取り組んだことが、わかった。

（５）協働的に課題に取り組めたか

ア　協働的な学びをどのように捉えたか

図 22 は、事前・事後アンケートの「グループ活動で、学びが深まったり広がったりしましたか」という質問（４件法）における回答割合である。

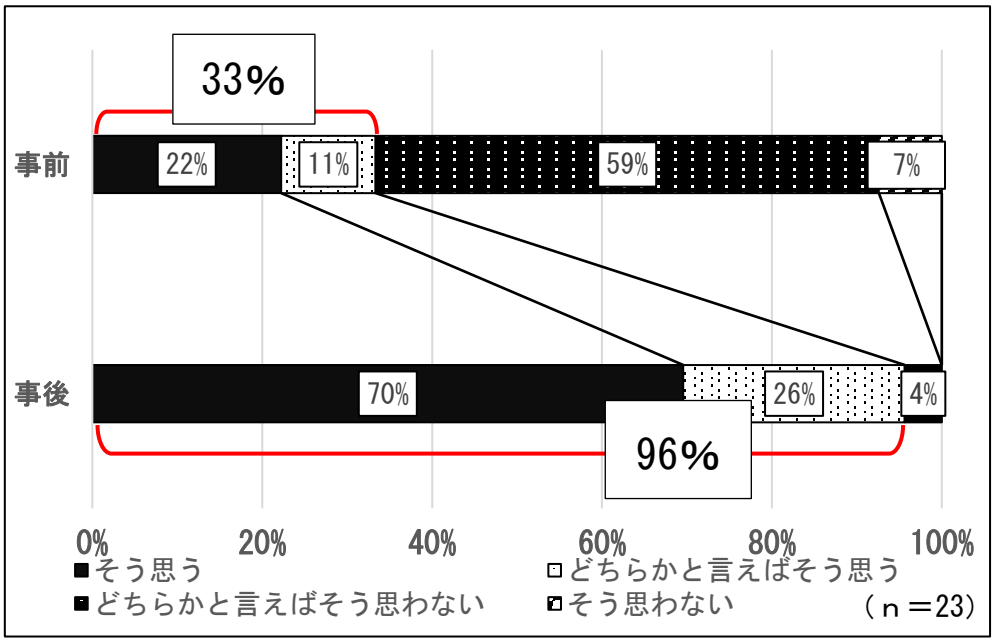


図 22　「グループ活動で、学びが深まったり広がったりしましたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

図 22 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の 33%から事後では 96%と 63 ポイント上昇した。今回の保健授業を通して、ほぼすべての生徒が協働的な学びを通して、学びが深まったり広がったりしたことがわかった。

このことから、授業前のグルーピングの工夫を行う等の手立てが有効となり、生徒は安心して授業に参加し、協働的な学びにつながったと考えられる。

表 20 は、事前・事後アンケートの「グループ活動で、学びが深まったり広がったりしたか」という質問における回答割合の推移である。

表 20「グループ活動で、学びが深まったり広がったりしたか」に対する事前・事後の推移内訳

「４（そう思う）」「３（どちらかといえばそう思う）」「２（どちらかといえばそう思わない）」「１（そう思わない）」

４➡４	６名（26%）	３➡４	１名（４%）	２➡４	10 名（43%）	１➡４	０名
４➡３	０名	３➡３	２名（８%）	２➡３	２名（８%）	１➡３	１名（４%）
４➡２	０名	３➡２	０名	２➡２	１名（４%）	１➡２	０名
４➡１	０名	３➡１	０名	２➡１	０名	１➡１	０名

表 20 を見ると、「どちらかといえばそう思わない」から「そう思う」に推移した人数が 10 名（全体の 43%）と最も多かったことがわかった。このことから、今までグループ活動を行った経験が少なかったり、話し合う時間が少なかったりしたことから、本研究の３つのグループ活動の工夫が有効となり、学びが深まったり広がったりしたと考えられる。

表 21 は、特に顕著な変容が見られた生徒Ｙの回答の変化を表したものである。

表 21　表 20 で２⇒４に推移した、グループ活動に対する生徒Ｙの回答の変化

	質問	回答
事前アンケート	これまでの保健の授業におけるグループ活動で、学びが深まったり広まったりしましたか。	あまりグループ活動がなかった。
事後アンケート	今回のグループは取り組みやすかったですか。	（今までは）あまり、コミュニケーションを取って活動ができていなかったので、私はとても楽しかったし、またしたいです。
授業の振り返り（２時間目）	感染症の個人及び社会的な対策について、「学んだこと」「理解したこと」を書いてください。	みんなの意見を聞いて、納得することばかりでした。

表 21 を見ると、事前アンケート調査の質問で、「これまでの保健の授業におけるグループ活動で、学びが深まったり広まったりしましたか」についての自由記述の回答において、「あまりグループ活動がなかった」との回答をしていたが、今回の保健の授業では、毎時間のグループ活動を行い、他者と意見を伝え合うことで学びが深まったり広まったと考えられる。また、事後アンケートの質問、「今回のグループは取り組みやすかったでか」についての自由記述の回答で、「（今までは）あまり、コミュニケーションを取って活動ができていないので、私はとても楽しかったし、またしたいです」の回答から、生徒は普段の学校生活では、コミュニケーションを取れていない状況であったため、授業を通じて生徒同士のコミュニケーションを図りたいということがわかった。さらに、授業の振り返り自由記述において、「みんなの意見を聞いて、納得することばかりでした」の回答からもグループ活動の有効性を感じていることがわかった。

イ　協働的な学びは有効であったか

「協働的な学びは有効であったか」を検証するため、発話内容や映像音声を分析することとした。

発話記録の作成については、各班に IC レコーダーを置いて録音し、録音した生徒の発話を発話者が特定できる形で書き起こした。その際、発話者の特定には学級担任に協力をいただいた。発話回数のカウント方法は、平成 31 年度体育センター長期研究員の川端が参考にした、

東京大学 CoREF「平成 25 年度活動報告書」（松本　2014）の埼玉県立新座総合高等学校松本優介の授業分析の事例に倣って、生徒の発話を息継ぎによって区切り、１人の生徒が一息で行った発言を発話１回としてカウントした。また、生徒の「うん」や「はい」といった相づちも発話１回としてカウントし、課題とは関係のない発言については、発話回数から除外した。

図 23－１から図 23－３は、発話回数を５分あたりに換算した発話回数である。

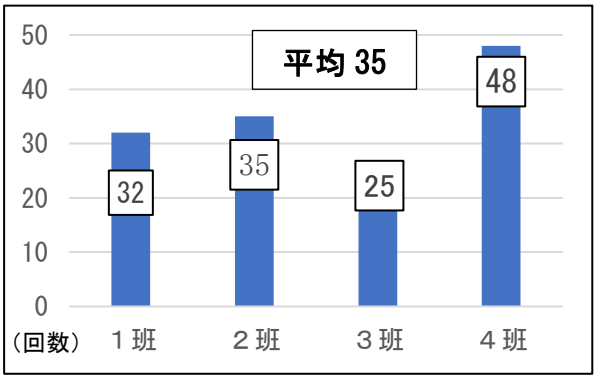


図 23－１　１時間目の発話回数（４分 20 秒）

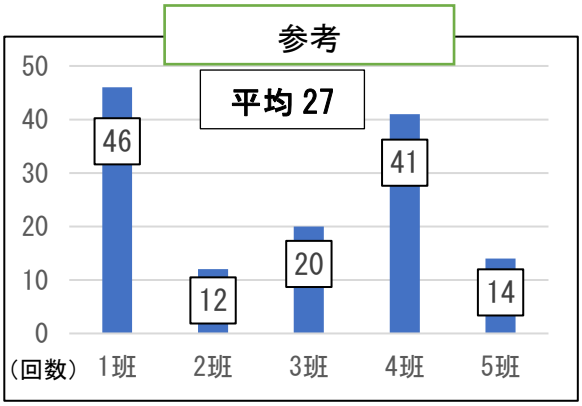


図 23－２　２時間目の発話回数（５分 00 秒）

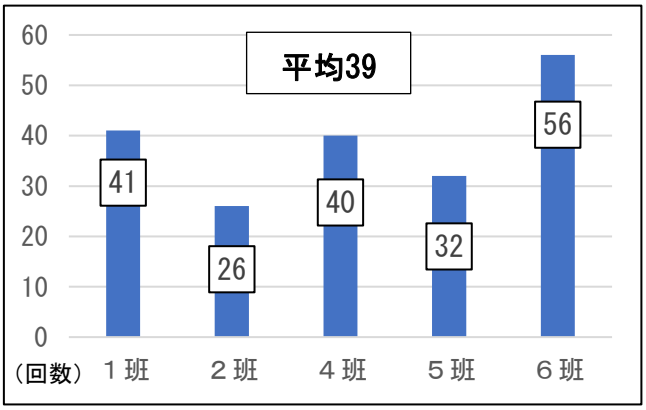


図 23－３　３時間目の発話回数（８分 20 秒）

図 23－１から図 23－３を見ると、全体としては、１時間目よりも２時間目の発話回数が低くなっているが、２時間目は個人で考えた感染症予防対策を付箋に記入しボードに貼ったため、立ち歩いてボードを見ながら話している生徒が多くおり、ＩＣレコーダーで聞き取れなかったことから、こうした結果になっている。そのため、２時間目の発話回数は参考とした。しかし、映像で確認すると、１時間目よりも発話回数が多いことがうかがえる。

また、３時間目に発話回数が増えたことについては、３時間目の課題が、生徒にとって最も考えてみたくなる内容であったことや、生徒が話合いに慣れてきたこと等が要因として考えられる。

表 22 は、発話内容を分析するための分類表である。

表 22　発話内容分析のための分類表

分　類	内　容	発話例
要素 A （同調、賛成、協力）	協働的な学びは有効であったか	「私も大体一緒」 「基本的にみんながやってることを消していけばいいんじゃない」
要素 B （自主的、自発的、参画）	興味・関心を持って授業に取組めたか	「何で２番が布なの」 「参加しよう」
要素 C	要素 A・B 以外の要素	「わかんない」

表 22 は、発話分析にあたり、塚本らが行った発話分析の分類を参考にし、課題に取り組む際の分類表を作成した（塚本　2001）。その際、協働的な学びは有効だったかについては、発言のなかで「同調」「賛成」「協力」に関する発言があれば要素 A とした。興味・関心を持って授業に取り組めたかについては、発言のなかで「自主的」「自発的」「参画」に関する発言があれば要素 B とした。それ以外の発言については、要素 C とした。

表 23－１から表 23－６は、４班の毎時間における発話内容を分類した表である。４班は、３時間にわたって生徒の入れ替わりが他の班よりも少なかったため、検証の対象とした。また、発話内容の分類は、表 22 を参考にして、筆者と当センター指導主事（１名）で行った。

表 23－１から表 23－６は実際の発話回数である。

表 23－１　４班　発話内容別回数（１時間目）

分類	生徒 a	生徒 b	生徒 c	生徒 d	生徒 e	合計 発話回数
要素Ａ （協働的な学び）	7	8	2	7	1	25
要素Ｂ （興味・関心）	4	10	0	1	0	15
要素Ｃ	1	0	1	0	0	2

（単位は回）

表 23－２　４班　発話内容の一部（１時間目）

生徒 d	私も大体一緒	（要素Ａ）
生徒 d	私も	（要素Ａ）
生徒 b	どう皆様？	（要素Ａ）
生徒 b	ウチはちょっと違う	（要素Ｂ）
生徒 d	ちょっと違う、どんな感じ？	（要素Ａ）
生徒 b	えっと、１番がN95	（要素Ｂ）

表 23－１を見ると、要素Ａの発話回数が 25 回と多い結果となった。また、課題に取り組んだ序盤は要素Ｂの発話回数が多い理由は、出席番号の若い順から発表したからであ

る。課題に取り組む中盤から終盤にかけては、要素Ａの発話回数が多かった。これは、各自の発表に対して、同調や賛成するような発言をしたことが影響したと考えられる。

表 23－３　４班　発話内容別回数（２時間目）

分類	生徒 a	生徒 b	生徒 c	生徒 d	生徒 e	合計 発話回数
要素Ａ （協働的な学び）	2	4	6	11	1	24
要素Ｂ （興味・関心）	0	10	1	2	0	13
要素Ｃ	0	0	2	0	2	4

（単位は回）

表 23－４　４班　発話内容の一部（２時間目）

生徒 c	参加しよう	（要素Ａ）
生徒 d	いいんじゃない	（要素Ａ）
生徒 d	どうする	（要素Ａ）
生徒 d	どれがいい	（要素Ａ）
生徒 a	どれにしようか迷うね	（要素Ａ）
生徒 d	どれにする	（要素Ａ）

表23－３を見ると、要素Aの発話回数が25回と多い結果となった。１時間目と同様に、課題に取り組んだ序盤では、要素 B が多い結果となり、中盤から終盤にかけては要素 A が多い結果となった。

また、表 23－４を見ると、中盤で話合いが進まない時間があったが、生徒 c が「参加しよう」の発言を言ったことで話合いが活発になった。さらに、生徒 d が「どうする？」、「どれにする？」等の発言をしたことで、グループのメンバーが話しやすい雰囲気を作ったと考えられる。

表 23－５　４班　発話内容別回数（３時間目）

分類	生徒 a	生徒 b	生徒 c	生徒 d	生徒 e	合計 発話回数
要素Ａ （協働的な学び）	10	4	6	6	1	27
要素Ｂ （興味・関心）	4	16	10	9	1	40
要素Ｃ	0	0	0	0	0	0

（単位は回）

表 23－６　４班　発話内容の一部（３時間目）

生徒ｄ	なんかウイルスって弱まっていくって聞いたことがある	（要素Ｂ）
生徒ｃ	私はちょっと下がった後に油断してまた上がると思う	（要素Ｂ）
生徒ａ	それはあるそれはある	（要素Ｂ）
生徒ｂ	そういうところ日本人あるから	（要素Ｂ）
生徒ａ	そうそう	（要素Ａ）
生徒ｃ	やっぱり下がっていくよね	（要素Ａ）
生徒ｄ	そんな気がする	（要素Ａ）
生徒ｂ	下がっていくけどちょっと上がる	（要素Ｂ）
生徒ｂ	ワクチンが出来れば早いと思うね	（要素Ａ）

表 23－５を見ると、要素Ｂの発話回数が 40 回と多い結果となった。要素Ｂの発話回数が１番多くなった要因としては、授業を重ねることによって、自信がついた生徒が自分の考えを発言するようになったり、自ら興味・関心を持って課題に取り組むようになったことで、発話回数が多くなったと考えられる。

表 23－６を見ると、「なんか、ウイルスって弱まっていくって聞いたことがある」や「私はちょっと下がった後に油断して、また上がる」、等の発言でもわかるように、自身の考えをグループのメンバーに伝えていた。また、３時間とも生徒ｅの発言回数は少ないものの、映像で見ると、グループのメンバーが話しているときに声を出してはいないが、頷く動作をしているときがあった。

表 24 は、１時間目に発話の少なかった４名（Ａ～Ｄ）を抜粋し、３時間の発話回数を示した表である。

なお、表中の時間は話合いの時間、括弧内は５分あたりに換算した発話回数、平均は３時間すべてに出席した生徒 17 名の平均を表している。

表 24　各時間の生徒の発話回数（単位：回）

	１時間目	２時間目（参考）	３時間目
生徒Ａ	0(0.0)	3(3.0)	5(3.0)
生徒Ｂ	0(0.0)	1(1.0)	7(4.2)
生徒Ｃ	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
生徒Ｄ	1(1.2)	0(0.0)	2(1.2)
平均	6.4(7.3)	4.2(4.2)	14.1(8.4)

（２時間目は、聞き取れない発話があったため参考とした）

表 24 を見ると、１時間目(7.3 回)に比べ、３時間目(8.4 回)の発話回数が多いことがわかる。これは、３時間目の課題が、最も生徒が考えてみたくなる内容であったことや、生徒が話合いに慣れてきたこと等が原因として考えられる。次に、生徒を個別に見ていくこととする。生徒ＡとＢは、２時間目以降発話が増えたが、生徒Ｃは、２時間目以降もすべて０回であった。しかしながら、映像を見ると、３時間目には、他者と違った視点で作成したグラフをグループ員に見せたことから、グループ代表に選ばれ、クラスの全体に対し、発表することとなり、声は小さかったが、必死に自分の考えを伝えようとしている姿

が見られた。この生徒は、事後アンケートで、今回のグループは取り組みやすかったと回答しており、仲間に恵まれ、グループ活動に慣れていったと考えられる。

表 25 は、生徒Ｂの３時間分の主な発話内容である。

表 25　生徒Ｂの３時間分の主な発話内容

１時間目	（発言無し）
２時間目	本当に思う
３時間目	大分、ざっくりだけど、こんな感じかな
	皆、ちゃんと書いているけど線も書けていない
	時間がないから、早くやらなきゃって思って
	何とも言えない感じだよね
	うん
	とりあえず、皆同じようなグラフならグラフから書いたほうがいいかも
	後付けみたいになっちゃうけど

表 25 について、生徒Ｂは、非常に大人しい性格で、自分の意見を他者に伝えることが苦手な生徒である。事後アンケートでは、「今回のグループは、どちらかというと取り組みやすかった」と回答しており、授業に慣れ、話しやすい仲間がグループにいたことから、時間を重ねるにつれ発話回数が増え、３時間目には発話回数が７回となったと考えられる。内容的には、主語が省略されていることから、はっきりとはわからないが、グラフを書いて見せたようであり、また、話合いの仕方に関する発言もしている。このことは、クラス担任も驚く出来事であった。

以上のことから、発話分析において、互いに協力しながら課題に対して取り組んでいることが明らかになった。このことから、協働的な学びが有効だったことがわかった。

（５）「協働的に課題に取り組めたか」のまとめ

- 授業前のグルーピングの工夫を行う等の手立てが有効となり、生徒は安心して授業に参加し、協働的な学びにつながったと考えられる。
- ほぼすべての生徒が、協働的な学びを通して、学びが深まったり広がったりしたことがわかった。

第４章　研究のまとめ

１　研究の成果と課題

仮説検証の結果等から、本研究の成果と課題を次のように整理した。

（１）成果

ア　授業評価の高まり

授業を重ねるごとに、生徒は授業を肯定的にとらえるようになった。また、生徒は、今回の新型コロナウイルス感染症を教材とした授業を、「今後の生活にいかせる（有益性）」と捉えていた。

イ　主体的な学びにつなげる興味・関心の高まり

ほぼすべての生徒は、興味・関心を持ち授業に取り組んでいた。

そして、三つの見える化教材(新型コロナウイルスや飛沫等の見える化教材、グラフを活用した見える化教材、授業の内容を見える化する事前動画)は、ほとんどの生徒が肯定的・好意的に受け取り、興味・関心を高めることに貢献できたと考えられる。また、「語り」により意欲が高まり、興味・関心の高まりとともに、主体的な学びの実現に貢献できたと考えられる。

ウ　対話を通じて取り組む協働的な学びの実現

ほぼすべての生徒が、協働的に課題に取り組んでいた。

そして、生徒の記述等から、対人関係において、悩みや課題を抱えている生徒にとって、人間関係等を重視したグルーピングの工夫は、安心できる学習環境の保障となったと考えられる。そして、一つの課題に対話を通じて取り組む協働的な学びの実現につながったと考えられる。

また、安心感という面では、授業の見通しを持たせる事前動画も貢献したと考えられる。

（２）課題

ア　多様な他者との協働的な学びへの拡充

本研究では、グルーピングの工夫により、対人関係のストレスを可能な限り少なくし、協同的な学びの実現を図った。「答申」においては、多様な他者と協働する力の育成が求められており(中央教育審議会　2016　p.35)、今後も協働する仲間をさらに広げていく必要があり、引き続きそのためのグルーピングの工夫が今後の課題である。

２　授業づくりの提案

本研究の成果と課題を踏まえ、新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材の活用とグルーピングの工夫を通して、生徒が興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組む保健の授業づくりのポイントについて、次のとおり提案する。

（１）安心できる学習環境づくり

学習面や対人関係に悩みや課題を抱えている生徒に対しては、まずは安心感を持たせることが重要であり、協働的な学びの実現のためには、安心できる環境づくりが前提となる。

そこで、具体的に次の２項目を踏まえた授業づくりを提案する。

ア　話しやすい仲間のいるグループを作ること(教師による工夫)。さらに、段階的に協働する仲間を広げていくこと。

イ　授業の見通しを持たせること(事前動画の配信等)。

（２）興味・関心を高める見える化の促進

興味・関心を持たせるためには、見える化の促進が有効であり、興味・関心を持つことが、協働的な学びにもつながると考え、次の４項目を踏まえた授業づくりを提案する。

ア　授業の見通しを持たせること(事前動画の配信　前掲)。

イ　見えないウイルスや飛沫が見られる動画の活用。

ウ　予測困難な未来をグラフ化しながら考える課題の設定。

エ　授業の意義の明確化(「語り」の導入)。

（３）単元の概要

今回は新型コロナウイルス感染症感染拡大防止の観点から短縮授業となり、40 分で授業を実践したが、多くの学校は 50 分の授業が基本である。そこで、以上の本研究の成果と課題を基に、「感染症とその予防」を 50 分の授業モデル（p. 55 図 24 参照）として、本研究で実際に行った授業を次のとおり参考として活用して欲しい。

時間	1	2	3
内容	オリエンテーション 感染症とその予防	感染症とその予防	感染症とその予防
0 5 10 15 20 25 30 35 40 45 50	○オリエンテーション（2分） ●語り（5分） ○アイスブレイク（3分） ・じゃんけんゲーム。 ●発問（5分） 「新型コロナウイルス感染症に感染してしまい、差別や偏見を受けている人が多くいます。なぜ、差別や偏見がうまれるのでしょうか？どうすれば防げるでしょうか？」 ●講義【教師の説明】（10分） ・感染症の予防原則について理解する。 課題に取り組む 「マスクの有効性が高い順にランキングを作ろう」 ○個人で課題に取り組む。（5分） ○グループで知恵を出し合う。（8分） ・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。 ○グループで意見をミニホワイトボードにまとめて共有する。（5分） ●教師からの評価（2分） ○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（5分）	●語り（5分） ●講義（教師の説明）（10分） ・感染症の予防対策について理解する。（海外、日本、神奈川県） 課題に取り組む 「三つの事例から一つ選び、それぞれの状況を踏まえ、責任者の立場で新型コロナウイルス感染症の予防・対策を考え提案しよう。」 ○個人で考える。（5分） ○グループで知恵を出し合う。（10分） ・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。 ・課題が達成していない人に課題が達成した人たちはヒントを与える。 ○グループで意見をミニホワイトボードにまとめて黒板に掲示し共有する。（12分） ●教師からの評価（3分） ○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（5分）	●語り（5分） ●発問（4分） 「新型コロナウイルス感染症以外で知っている感染症はありますか？」 ●講義（8分） ・感染症は時代によって発生や流行に違いが見られることについて理解する。 課題に取り組む 「今後、日本人の新型コロナウイルス感染症の死亡者数は、どのように推移するか考えよう！ ○個人で考える。（5分） ・課題が達成していない人に課題が達成した人たちはヒントを与える。 ○グループで知恵を出し合う。（8分） ・分からない人はレスキューカードを出して助けてもらう。 ○各グループが考えたグラフとその理由を発表する。（5分） ●まとめの講義（5分） ・今後の感染症との向き合い方について理解する。 ○理解度チェックテスト（5分） ○学習カードに本時の自己の学習の振り返りを行う。（5分）

図 24　単元の概要

○ ← 学習活動（生徒の活動）　● ← 教師の指導　・ ← 活動の留意点

３　今後の展望

（１）生活に役立つ教材の精選

保健の授業で扱う内容は、実生活に密接した内容が多い。新型コロナウイルス感染症は、現在流行している感染症のため、様々な情報が飛び交い、確かな情報を得ることに苦慮したが、生徒にとってもすでに「現在の生活」に大きく関わっていることから、今回の授業は新型コロナウイルス感染症を教材として扱うこととした。

図 25 は、事前・事後アンケートの「これまでの（中学校・高校）／今回の保健の授業は、現在の生活や今後の生活に役に立つ内容でしたか」という質問（４件法）における回答割合である。

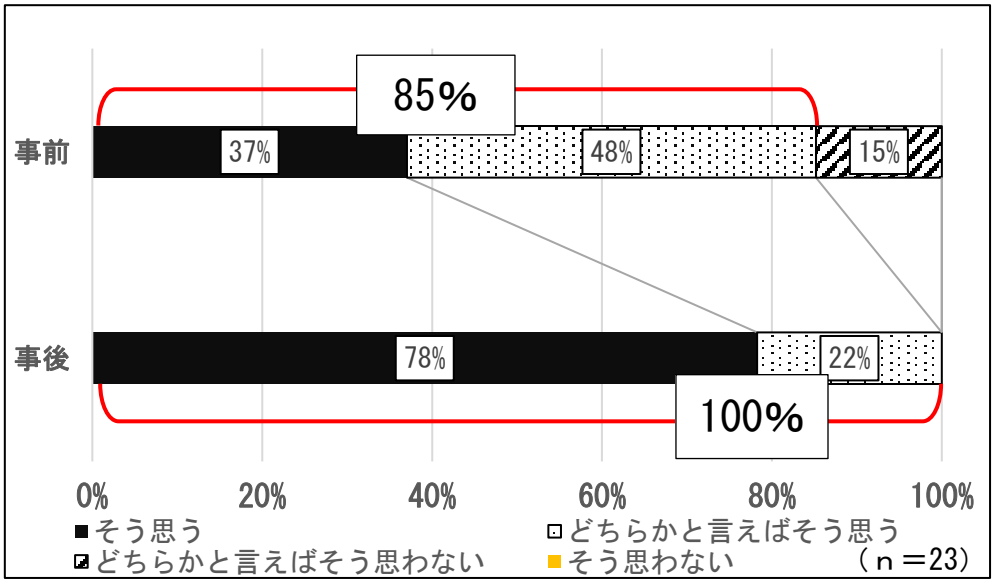


図 25　「これまでの（中学校・高校）／今回の保健の授業は、現在の生活や今後の生活に役に立つ内容でしたか」に対する回答割合の事前・事後の比較

図 25 を見ると、「そう思う群」の割合は、事前の 85%から事後では 100%と 15 ポイント上昇した。今回の保健授業の授業を通して、生徒全員が、現在の生活や今後の生活に役に立つ内容だったと理解したことがわかった。

特に「そう思う」が事前から事後にかけて 41 ポイント上がった。このことは、今回の授業で新型コロナウイルス感染症を教材として扱ったことが、現在の生活や今後の生活に役に立つ内容となったと考えられ、改めて生活に役立つ教材だったことがわかった。

そのため、今後は生徒の興味・関心を持たせることにつなげながら、生活に役立つ内容を教材として精選したい。

（２）多様な他者との協働的な学びの実現

今回は、人間関係に不安や課題を持っている生徒が安心して授業に参加できるようにグループの編成を行った。そのため、同じような生徒の実態がある学校では、ぜひ、活用していただきたい。また、担任から今回の授業を通じて、生徒の人間関係がよりよいものになったと伝えられた。具体的には、「総合的な学習の時間において、今まで大人しかった生徒が、自ら異性とペアを作って、楽しそうに話している姿には驚きました。」と生徒の変容が見ら

れたことから、今後は、教科横断的にグルーピングの工夫を実践していきたい。

そして、学年の担任間や教科間で生徒の情報を共有・連携し、学校の状況に応じて、グルーピングの工夫を学校全体で考え、生徒の協働的な学びにつなげていきたい。

（３）事前・事後動画について

本研究では、授業前に事前動画を配信したことで、生徒が授業の見通しをもつことができて安心して、授業に興味を持つことができたと考えられる。

本校では学校の特色として学びなおしを推進している。だからこそ、動画は見ている途中で、分からない部分は繰り返し見られることが学びなおしの魅力の一つだと考えた。

また、今回は事後動画の作成は行わなかったが、事後動画を作成し、生徒に配信することで、授業に参加していた生徒は授業の復習が行え、学びが深まると考えた。また、授業を欠席した生徒には、授業で行ったことを確認できるため、次の授業に安心して参加できるという大きなメリットがあると感じている。特に、不登校等で学校に行けない生徒に大きな希望を与えると考えた。

そこで、今後は学校現場で対面指導も重視しながら、事前動画や事後動画が広がっていくことを期待したい。例えば、教科のなかで単元ごとに担当者を決めて動画を作成すれば業務負担を感じることも少ないと考える。

実際に、本校の保健体育科教員が事前動画を作成し、配信した。事前動画を見た生徒の感想「わかりやすかったし、途中の字幕も良かったです。」という感想から、事前動画が生徒にとって効果的であったと考えられる。

そしてこれからは、ＩＣＴの発展により益々手軽に動画の配信ができるようになると考えられることから、今後は事前動画に加え、事後動画の配信等、ＩＣＴを活用した取組を推進していきたい。

（４）すべての教科で見える化教材作成

本研究の手立てとして、授業の内容をわかりやすく伝え、授業に興味・関心を持たせるため、新型コロナウイルス感染症を中心とした見える化教材を作成した。これまで、授業中に文章や言葉で伝えると生徒の頭に入りにくいことが多々あった。そのため、前述した手立てを検証した結果、生徒にとってわかりやすく伝わったことや、興味・関心を持つことが明らかになった。

以上のことから、今後は、「感染症とその予防」だけでなく、すべての教科で見える化した教材が普及していくことを期待したい。

（５）職員と協働した授業づくり

本研究を進めるにあたり、本校の職員と情報を共有、連携していくことが必要だと感じていた。

そこで、私から何の研究をしているのか。何のために研究をしているのかを記した「研究通信」を発行することとした（p. 59 図 27 参照）。職員からは、「自分自身も実際に授業の手立てを参考にします」等の肯定的な意見を数多くいただいた。

次に、筆者が４年前に立ち上げた校内研究会に参加した。校内研究会にオンラインで参加し、自身の研究について伝え、職員からは生徒の現状や、実際に授業で有効だった教材に関して意見交換できたことが授業づくりの参考となった。

さらに、検証授業を行う学級の担任や教科担当が親身になって話をしていただき、相談に

乗っていただいたことが非常に有難かった。校務多忙の中ではあったが、「よい授業を作る」ことを共に目指せたことが財産である。

以上のことから、授業研究を進め、学校で授業を行うことを考えれば、職員と協働することが「よりよい授業づくり」を実践する上で必須条件だったと考える。今後は教科内や教科間、学級担任と情報共有、連携していくことが「よりよい授業づくり」につながると考え実践していきたい。

※研究通信の詳しい内容については、「令和２年度体育指導センター長期研修研究報告　資料編」（pp. 46 - 60 参照）

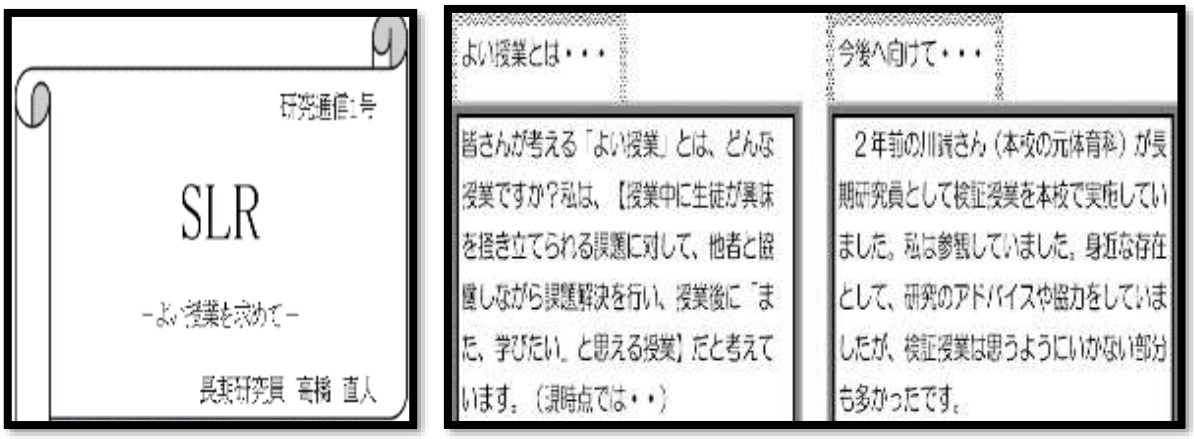


図 27　実際に作成し、配付した研究通信

（６）すべての子どもたちの可能性を引き出す、協働的な学びの実現を目指して

令和３年の中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」では、新学習指導要領の着実な実施やＩＣＴの活用を目指して、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められる」（中央教育審議会　2021　p. ３）と示された。

本研究では、「協働的な学び」に対して、グルーピングの工夫による効果があったことがわかった。そのため、上記で示したように、今後はあらゆる他者と協働できるような取組を実践していきたい。

最後に、検証授業を実施した学級の生徒が、アンケートや授業の振り返りの回答で次のような感想を述べていた（原文を掲載）。

保健の授業とかは、グループで話し合って、発表するっていうのが僕には欲しくて、本当に今回の髙橋先生の授業は今までの保健の授業よりすごく良くて、すごく集中できて最高の授業でした。本当にありがとうございました。

感染症の予防とか、大人になった時に保健の授業で学んだことを活かして、生活していけるのですごく役に立つと思いました。

まず、感染症が僕も知らないものがあり、びっくりしました。後は、感染症の予防について色々な予防があって、すごくためになる授業で受けて良かったと思いました。こういう授業は楽しくてわかりやすくて最高です。また、授業が受けれたらお願いします！３時間の授業ありがとうございました。

消毒やマスク、ワクチン接種、免疫力増加等の一番知りたかった新型コロナウイルス対策について、たくさんのことを学べました。

コロナウイルスとは、危険だということをよく学べたのではないかと思います。いままでコロナウイルスをあまくみすぎていたので、そういうところでも学んで変わったなと思いました。

本研究では、興味・関心を持ちながら協働的に課題に取り組ませることを目指した。

しかし、学習面や人間関係に課題を抱えている生徒が多い現状を目の当たりにして、安心して授業に参加できる工夫が必要だと感じた。そのため、授業前に授業通信を発行したり、事前動画を配信したりした。そのような手立てが生徒にとって有効だったことから、１時間目の授業から、主体的に授業へ取り組んでいる姿が見受けられた。それは、授業に対して「安心感」を持つことができた結果だったとも考えられる。

また、授業がきっかけとなり、学級の雰囲気も変わっていったことが、担任の次のコメントに記されていた。

本日のすこやか（総合的な学習の時間）の授業計画では、クラスメイトとの共有はしないことになっていました。 しかし、私達２人の担任は、髙橋先生の授業を受けた後の生徒を見て、これらの計画を変えることにしました。「隣同士だけでなく、男女で自由に相手を見付けて、お互いの欲求について共有させてみよう」というワークをやることにしました。 その決断をした理由は、髙橋先生の授業のおかげで、クラスの雰囲気がとても良くなっていたからです。 髙橋先生が授業で行ったグループワークのおかげで、生徒一人一人が、他人と話すことの恐怖を乗り越え、話し合うことによって得ることのできるあたたかさ等に気付き始めました。 このことは、髙橋先生の授業を行った翌日の生徒たちの顔を見て、感じたことです。 男子同士のペア、女子同士のペアが目立つなか、男女のペアもありました。生徒自らが動き、男女でペアを作る姿を担任である私は初めて見ました。男子が照れながらも、女子に話しかけている光景は、担任として、とてもうれしいものでした。

これも、髙橋先生の授業のおかげです。
　髙橋先生の授業は、生徒にグループワークの楽しさ、多くの人と触れ合うことの楽しさやあたたかさを伝えてくれました。

　私自身、保健体育科教諭として、これまで苦悩や様々な課題を感じながら授業を実践してきた。今回、長期研究員として生徒にとってよい授業を作っていくためには何が必要なのか。日々、自問自答を繰り返していた。そのような中、中央教育審議会答申や学習指導要領を読み込んでいくことでヒントになることが大いにあった。自らの考えや取組を再構築する良い機会となったことに感謝したい。また、こんなにも授業を行って感動したことは初めてだった。最善の準備をすれば、１時間で生徒は変容していくことも実感した。だからこそ、授業の専門家として、さらに授業を大切にしようと強く感じた。
　そして、コロナ禍の状況であったが、生徒もクラスメイトと話すことを心から望んでいるようだった。コロナ禍だからできないのではなく、今後もどういう状況であっても、できる理由を考えて、「よい授業」を追い求めて、生徒が学びやすい環境を整えていきたいと思う。

謝辞
　最後になりましたが、本研究を行うにあたり、御多用の中、快く受け入れてくださった相模向陽館高等学校の校長先生、副校長先生、教頭先生、クラス担任の先生方、保健体育科の先生方、授業前日の模擬授業に参加していただいた先生方、授業当日に朝早くから準備をしていただいた先生方、検証授業や研究協議へ参加していただいた先生方に感謝いたします。また、専門的な見地から様々な御指導、御助言をいただいた、横浜国立大学教育学部の物部博文氏、座間市立旭小学校の橋本恵美子校長先生、神奈川県教育委員会教育局指導部保健体育課の桐原指導主事に感謝致します。
　そして、何より検証授業に前向きに取り組んでくれた相模向陽館高等学校の生徒たちと、協力してくださった保護者の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

引用、参考文献等

相模向陽館高等学校 2020　「学校ナビゲーション」　p. ２

神奈川県教育委員会高校教育課 2020 「県立高校等の今後の教育活動に関する留意事項について」（通知）

中央教育審議会　2016　『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』

中央教育審議会　2016　「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料」　p. 13

中央教育審議会　2021　「『令和の日本型教育』の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」　p. ３

文部科学省　2009　『高等学校学習指導要領（平成 21 年告示）　pp. 73-74

文部科学省　2018　『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）　p. 178

文部科学省　2009　『高等学校学習指導要領（平成 21 年告示）解説　保健体育編　体育編』東山書房　p. 105

文部科学省　2018　『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　保健体育編　体育編』東山書房

朝倉将宏　2013　「学習意欲を高めるための課題設定の在り方」　p. 203

伊澤悟　2019　『応力理解のための力と変形の見える化教材開発』（２. 学習項目と教材　２－３　教材開発のねらい）

石田敏　1977　「視聴覚資料の効果的利用」　pp. 54－55

川端健司　2018　「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した保健学習　（神奈川県立体育センター長期研修研究報告）　pp. 39-40

塚本榮一　2001　「学習者の理解変容に関与する発話分析」　p. 30

七木田文彦　2002　『保健授業評価票作成の試みー中学生の授業評価構造に着目してー』　（学校保健研究 44 巻）　pp. 47-55

橋本恵美子　2010　「『学び合い』の授業導入の『語り』とは？」　（西川純　2010　『クラスが元気になる『学び合い』スタートブック』　学陽書房）　pp. 86-88

西川純　2010　「クラスが元気になる『学び合い』スタートブック」　学陽書房

松本優介　2014　「第５章　学習『評価』研究への提言」　『自治体との連係による協調学習の授業づくりプロジェクト　平成 25 年度活動報告書』　東京大学 CoREF　p. 207

森良一　2020　「新型コロナウイルス感染症への対応と保健の授業」　（『体育科教育７月号』大修館書店）　pp. 40-43

ＮＨＫ　2021　「特設サイト　新型コロナウイルス　https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/（2021 年３月５日取得）